

THE JOURNAL OF
JAPANESE HISTORY OF PHARMACY

薬史学雑誌

Vol. 5, No. 2.

1970

— 目 次 —

(原 報)

和漢薬の本草文献的研究 (第2報)

— 漏蘆・飛廉・苦芙について —

.....難波恒雄・久保道徳・故高橋真太郎..... 1

(シンポジウム)

= 比較民族薬物論 =

ブラジルの民族生薬について.....橋 本 庸 平.....13

アフリカ北部の生薬と生薬療法.....長 沢 元 夫.....19

アイヌの薬.....三 浦 三 郎.....21

インドネパールの民族薬物について.....伊 藤 和 洋.....24

(学 会)

日本薬学会第90年会・薬史学部会.....50

会 則

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY

Nihon University, Pharmaceutical Institute,
Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

薬史学誌

J. His. Pharm.

日 本 薬 史 学 会

健康の原点とビタミンE

薬に無関心な方にも
30才から知っていただきたい
ビタミンEの豆知識

問・ビタミンEはどんなものに多いのでしょうか？

答・お母さんのお乳にはたいへん豊富に（100グラム中10ミリグラム）含まれています。また、食品では小麦の胚芽やゴマ、ピーナッツ、おイモなどに比較的多く含まれています。

問・わたくしたちの食卓からは十分摂れているのでしょうか？

答・日本と米国の平均献立から、ビタミンEの摂取量を調べたところ、日本人は米国人の1/2ぐらいしかビタミンEを摂っていないということがわかりました。

問・ビタミンEにはどんな働きがあるのでしょうか？

答・からだの中で脂肪が異常に酸化するのを防いでいるビタミンです。さらに、積極的な作用としては、血液の循環やホルモン分泌器官の働きが低下するのを防ぎます。

問・どんな症状や疾患に効くのでしょうか？

答・血液の循環が悪くなっておこる肩こり・手足の冷え・しびれ・耳鳴りなどの症状に。また、ホルモン分泌の乱れに原因する更年期障害・生理障害などに効果があります。さらに最近では、高血圧や糖尿病などの成人病対策にも活用されています。

問・長期間連用しても大丈夫でしょうか？

答・ビタミンEの過剰症は人間の場合報告されておられません。もともと食べものの中にも含まれているビタミンの一つですから安全性の高いものです。



問・ビタミンEが主剤のユベロン
の一日服用量とその薬価は？
答・栄養補給としては、一日一カ
プセルで十分です。症状や疾患
などを積極的に治すためには、
一日三カプセルをおすすめしま
す。この場合の一日薬価は44円
（150カプセル包装）です。

ビタミンEのトップ・メーカー
エーザイの

ユベロン

包装80・150カプセル

和漢薬の本草文献的研究 (第2報)

漏蘆・飛廉・苦芙について¹⁾

難波 恒雄^{2a)}, 久保 道德^{2b)}, 故高橋真太郎^{2c)}

Historical Studies on the Japanese and Chinese Crude Drugs in the Herbals and Books of Prescriptions (2)

On "Lou-lu", "Fei-lian" and "Ku-fu"¹⁾

Tsuneo NAMBA^{2a)}, Michinori KUBO^{2b)} and late Shintaro TAKAHASHI^{2c)}

Drug Research Institute, University of Toyama^{2a)},
Faculty of Pharmacy, Kinki University^{2b)} and
Faculty of Pharmaceutical Sciences, Osaka
University^{2c)}

Summary

"Lou-lu 漏蘆 is listed in Shên-nung-pên-ts'ao-ching 神農本草經 as the remedy for suppurative dermatitis, hemorrhoids, rheumatism and secretion poverty of milk. In view of the morphological descriptions by Su-ching 蘇敬, Pao-shêng 保昇 and Ma-chih 馬志 in Chêng-lei-pên-ts'ao 証類本草 the original plant of Lou-lu is considered to be *Echinops latifolius* TAUSCH of *Compositae*.

The original plant of "Fei-lien 飛廉" has been considered to be *Carduus* sp., but it is presumed through the herbals that Fei-lien is also originated from *Rhapontica unifolius* DC. of *Compositae* used in some districts for the same medical effects as Lou-lu.

Echinops latifolius and *Rhapontica uniflora* were widely used as true Lou-lu in Sung 宋 era as mentioned in Su-ch'ên-liang-fang 蘇沈良方. Now they are called by the name of Yü-chou-lou-lu 禹州漏蘆 (*Echinops latifolius*) and Ch'i-chou-lou-lu 祁州漏蘆 (*Rhapontica uniflora*) and used as the remedy for suppurative dermatitis and secretion poverty of milk as mentioned in Chung-yao-chih 中藥志.

Further, in view of the usage in the prescription of Lou-lu-t'ang 漏蘆湯, both of them are expected the same medical effects.

"Ku-fu 苦芙" is listed in Ming-i-pieh-lu 名醫別錄 as the remedy for lacquer poisoning, and it may be originated from *Cirsium* sp. or *Elephantopus* sp. or *Siegesbeckia* sp. or *Eleutheranthera* sp., but today Ku-fu is not used as well as Fei-lien.

富山大学薬学部和漢薬研^{2a)}, 近畿大学薬学部^{2b)}, 大阪大学薬学部^{2c)}

1) 日本生薬学会富山大会で発表, 1966年4月.

第1報, 薬史学雑誌, 4 (2), 2~12 (1969). 本報は漢薬・漏蘆の生薬学的研究, 生薬学雑誌, 23 (1), 28~35 (1969) の続報である.

2) Location: a; Gofuku, Toyama.

b; Kowakae, Higashiosaka, Osaka.

c; Toneyama, Toyonaka, Osaka.

漏蘆の基源に関して、趙燭黃³⁾は祁州(河北省安国県)の薬店にみられるものは *Centaurea monantus* GEORGI であり、禹州(河南省開封道)のものは *Echinops dahuricus* FISHER であると実地調査の結果を報告している。また最近では中薬志⁴⁾ および 中華人民共和国薬典⁵⁾ などには祁州漏蘆および禹州漏蘆の2種を市場の漏蘆としている。祁州漏蘆は *Rhapon-tica uniflora* DC. (= *Centaurea monantus* GEORGI) (*Compositae*) を基源とし、中国北慣部で用し、禹州漏蘆は *Echinops latifolius* TAUSCH (= *E. dahuricus* FISHER) (*Compositae*) を基源とし、中国南部で慣用するもので、祁州漏蘆の方が産量大で、一般的であると記載されているが、わが国に輸入されているものは、既報⁶⁾ のごとく禹州漏蘆の方である。ところでその薬効に関しては両者ともに化膿性皮膚疾患、乳汁分泌不足などの治療薬として用いられている。基源の異なるものが同一薬効で使用されていることは興味ある問題である。謝宗万⁷⁾ は異物同名生薬の一つとしてあげ、薬効上種々問題があると述べている。

古来、漏蘆の基源に関しては既報⁸⁾ のごとく、多種類のものが漏蘆と称されていた。江戸時代の日本の本草家達は、これに大変興味を示し、1721年に熊谷玄随⁹⁾ は証類本草、本草綱目および救荒本草に記載されている諸説の植物形態からそれぞれの基源を類推し、*Siphonostegia* sp., *Pulsatilla* sp., *Leucothoe* sp., *Aster* sp., *Gymaster* sp., *Serratula* sp. および *Carduus* sp. の植物図をあげ、「漏蘆弁」と題した論説を出した。その後、師匠の松岡恕庵¹⁰⁾ が1729年に「漏蘆弁」の植物図を若干改正し「漏蘆之弁」を書き、1776年には斉藤東溪¹¹⁾ が「漏蘆考」と題して、「図経にある漏蘆の一つの単州漏蘆は救荒本草の翻白草 (*Potentilla* sp.) に似る」という新知見を補遺している。当時漢薬の基源を類推する博物学的な研究は本草家の間で盛んに行なわれたが¹²⁾、このように一つの漢薬について本草書の記事を解説し、論説を附したものは少ない。しかし、これらの論考は決定的なことが論じられず、今後の高明な鑑定を待つと結語

している。

そこで今回、漏蘆およびそれに関連する飛廉、苦蕒について本草文献的に考察し、過去の混乱を整理し、さらに基源の異なるものが同一薬効で 사용되는ようになった歴史的過程を考証した。

I) *Echinops* 属を基源とする漏蘆について

漏蘆は神農本草経¹³⁾ の上品に「味苦寒主皮膚熱惡瘡疽痔濕痺不乳汁久服輕身益氣耳目聰明不老延年一名野蘭」と記載され、化膿性皮膚疾患、痔疾、リウマチおよび乳汁分泌不足に対して用い、名医別録¹³⁾ には「止遺溺熱氣瘡癰如麻豆可作浴湯」と記され、寝小便を止め、麻疹のようで痒みのある皮膚炎に浴湯料とすると述べている。植物形態に関しては、蘇敬¹³⁾ が「莖葉似白蒿花黃莢長似細麻如芙許有四五弁七月八月後皆黑於衆草蒿之類也」、韓保昇¹³⁾ は「葉似角蒿今曹兗州下湿地最多六月七月採莖日乾之黑於衆草」、馬志¹³⁾ は「莖葉大高四五尺子房似油麻房」と述べている。この基源植物に関しては日本の本草家、熊谷玄随、斉藤東溪¹¹⁾ および小野蘭山¹⁴⁾ などは、莖葉が蒿類に似、花が黄色で、萼筒が胡麻に似て

- 3) 趙燭黃, "祁州薬誌", 国立北平研究院生理学研究所, 中文報告彙刊, 第3巻, 第2号, 第1集, 1936, pp. 39-43.
- 4) 中国医学科学院薬物研究所等編, "中薬志", 第1版, 第1冊, 人民衛生出版社, 北京, 1959, pp. 498-503.
- 5) 中華人民共和国衛生部薬典委員会編, "中華人民共和国薬典", 1963年版, 1部, 人民衛生出版社, 北京, 1964, p. 295.
- 6) 難波恒雄, 久保道德, 高橋真太郎, 生薬学雑誌, 22 (1), 9~18 (1968).
- 7) 謝宗万編, "中薬材品種論述", 上冊, 上海科学技术出版社, 上海, 1964, p. 3.
- 8) 難波恒雄, 久保道德, 高橋真太郎, 生薬学雑誌, 23 (1), 28~35 (1969).
- 9) 熊谷玄随, "漏蘆弁", (1721).
- 10) 熊谷玄随著, 松岡恕庵校正, "蘆漏之弁", (1729).
- 11) 斉藤東溪, "漏蘆考", (1776).
- 12) 富士川游, "日本医学史" 日新書院, 東京, 1941. p. 334.
- 13) 唐慎微, "重修政和經史証類備用本草", 人民衛生出版社影印本, 第1版, 北京, 1957.
漏蘆: 卷7, 草部上品之下, pp. 181-182.
飛廉: 卷7, 草部上品之下, p. 184.
苦蕒: 卷11, 草部上品之下, p. 282.

乾けば黒くなるという点からヒキヨモギ
Siphonostegia chinensis BENTH. (*Scroph-*
ulariaceae) をあてた。そして、その後も漏蘆
 の基源はヒキヨモギであるとして疑われな
 かった。^{15), 16)} またこの植物は現に熱河(河北省
 承德県)では漏蘆と称し薬用(薬効不明)と
 されている¹⁷⁾。しかし、著者らはこのものに
 現在中国で正品の漏蘆の一つとしてあげてい
 る *Echinops latifolius* TAUSCH 禹州漏蘆
 を充てるのが妥当であると考え。なぜなら
E. latifolius は茎や葉が蒿類に似、くも糸状
 の軟毛を生じ、葉の裏面は白く、また枯れたり
 、陽乾すると黒かつ色に变じ¹⁸⁾、花は球状
 に集合し、小花が管状で先端五裂し、白色剛
 毛状の総苞があり、果期には果実をつつむ黄
 色の総苞片が莢のように見えることから明ら
 かである。産地に関しては、保昇は「今曹
 州下湿地最多」とのべ、曹州は今の山東省曹
 州府¹⁹⁾、兗州は山東省滋陽県で阿州とも山東
 省の西部にあたり、*E. latifolius* 禹州漏蘆の
 主産地の禹州(河南省開封道)の近くで、*E.*
latifolius の分布域に入る。図経¹³⁾ には「今
 京東州郡及秦海州皆有之」と述べ、単州、沂
 州、秦州、海州の諸州から集まった図²⁰⁾ (Fig.
 1~4) をあげ、それぞれについて解説し、産
 地により基源の異なるものが用いられていた
 ことを示している。4種の漏蘆の中で、単州漏
 蘆については、前述の蘇敬¹³⁾ の説を引き、この
 ものと相類していると述べている。このもの
 は図 (Fig.1) の葉や根の形態から *Echinops*
 属のものであると云える。単州漏蘆の基源に
 関しては、熊谷玄随はタムラソウ *Serratula*
coronata L. subsp. *insularis* (ILJIN.) KIT-
 AM. (*Compositae*) を充て、松岡恕庵はヒキ
 ヨモギを充て、齊藤東溪は救荒本草の翻白草
 に類似するといひ、趙燦黃³⁾ も単州漏蘆の図
 と *Potentilla chinensis* SER. カワラサイコ
 (*Rosaceae*) とは符合すると述べており、現
 に石戸谷²¹⁾ は朝鮮では *P. chinensis* を漏蘆
 として瘡毒、膿腫の治療薬として市販してい
 ると云っている。しかし、小野蘭山は明和6
 年(1769年)頃中国から輸入された漏蘆をみ
 て「根長サ五寸許皆蘆頭ニ鬚アリ偶枯葉ノツ

キタルアリテ諦視スルニヒゴタイニ異ナラズ
 故ニ単州漏蘆ヲタマバハキ(タムラソウ)
 トスル説ヲ改メヒゴタイトス」と喝破し、
Echinops 属に充てたのは誠に卓見である。
 それ故現在と同じ漏蘆⁶⁾ がわが国に輸入さ
 れたのは18世紀の中頃と考えられる。単州
 は今の山東省単県にあたり、分布上から
E. latifolius と考えられる。また図経に「一
 物而殊類若此 医家何所適従 依旧説以単州出者
 為勝」と記されていることから、北宋時代
 においても漏蘆の正常品は *E. latifolius* を基
 源とするものであったと推論される。

薬用部分に関しては、名医別録には「八月
 採根陰乾」とあり、外台秘要²²⁾ にある木蘭湯
 や犀角竹瀝膏の処方中の漏蘆は「漏蘆根」と
 明記され、太平惠民和剂局方²³⁾ にあげられた
 「千金漏蘆湯」には漏蘆に「去蘆」と注釈さ
 れている。蘆とは根に付いている残茎および
 根出葉の残基のことであり、地下部が使用さ
 れている記載がみられる。しかし宋代以前に
 は根ばかりでなく、茎、葉などの地上部も用
 いられ、とくに図経には「南方用苗北土多用

- 14) 小野蘭山口授, 小野蕙歆録, 井口楽三重訂, “重訂本草綱目啓蒙”, 岸和田邸学蔵版, 巻11, 草部, 湿草類, 1847, 22-24丁
- 15) 中尾万三, 薬誌, 304 (1920).
- 16) 小泉栄次郎, “和漢薬考”, 改訂4版, 朝香屋書店, 東京, 1925, p. 34.
- 17) 中国科学院林業土壤研究所編, “東北薬用植物誌”, 科学出版社, 1959, p. 176.
- 18) 牧野富太郎, “牧野新日本植物図鑑”, 北隆館, 東京, 1961, p. 669. *Echinops setifer* ILJIN. ヒゴタイについて「葉の上面は緑色, 下面は綿毛が密にはえて白色だが, 乾くと黒く変る」とのべ、ヒゴタイの漢名に漏蘆をあたえている。
- 19) 産地考証については、謝寿昌等, “中国古今地名大辞典”, 商務印書館, 上海, 1933., および青山定雄, “中国歴代地名大要覧”, 大安影印本, 東京, 1965. によった。
- 20) 証類本草の中で、政和、紹興本草の図と図版の題字とは合致しているが、大観本草は沂州漏蘆と、海州漏蘆の図が入れ換っている。参照した大観本草は武昌何逢時景利本(柯氏本大観本草)であり、大観本草が版本を組換えている間に、図の題字が誤って入れ換ったのであらうと思われる。
- 21) 石戸谷勉, “朝鮮薬学会々報”, 第5巻, 第3号, 1925, p. 139. 朝鮮産漢方薬の原植物に関する研究

根」とも記されている。

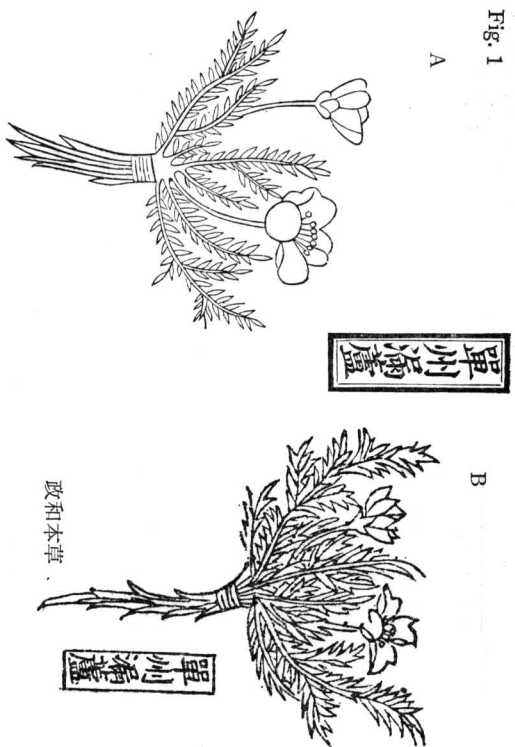
(*E. latifolius* は中国北部に分布²⁴⁾ するが、南部には *E. grijsii* HAMCE が分布し、これも漏蘆として用いられたようである。南宋時代に書かれた蘇沈良方²⁵⁾ にみられ「今閩中所用漏蘆茎如油麻高六七寸 秋深枯黒如漆時用苗本草自有一条正謂之漏蘆」と記されている。閩中は今の福建省のあたりで、分布上および植物形態上、明らかに *E. grijsii* の地下部が薬用とされていたことを示唆している。蘇沈良方は沈括の著述に加えて、彼と交渉のあった蘇軾の説を後人が附加してできたもので²⁶⁾、この記文は沈括の書いた「夢溪筆談」(1088年)²⁷⁾ にも見られることから、沈括の意見であり、北宋時代には *E. grijsii* も正常品の一つとして用いられていたと考えられる。現在でも江蘇省ではこの乾燥根を漏蘆として用いている^{28), 29)}。

明代以後は、李中立³⁰⁾ は「本草原始」(1578年)に根の基部に繊維状の葉柄残部が付いている生薬図 (Fig. 6-A) をあげ、「本草綱目」の附図³²⁾ の單州漏蘆の図 (Fig. 1-D) は証類本草の図 (Fig. 1-A, B, C) の花を球形の頭状花序に改め、「本草彙言」³³⁾ の生薬図 (Fig. 7) も根の基部に繊維状の根出葉残基の付い

た図をあげ、明らかに *Echinops* 属を基源とするものが正品の漏蘆として用いられ、今日慣用されていると考証する。

- 22) 王燾, "外台秘要", 卷 8, 国立中国医薬研究所出版, 台北, 1964, p. 237 および卷 15, p. 423.
- 23) 太平惠民和剂局編, "太平惠民和剂局方", 人民衛生出版社, 北京, 1959, p. 154.
- 24) SIRO KITAMURA, "Compositae Japonicae", *Memories of College of Science, Kyoto University*, SERIES B. 13, 14 (1937).
- 25) 蘇軾, 沈括, "蘇沈良方", 卷 1, 人民衛生出版社影印, 北京, 1956, p. 21, および卷 2 p. 28, p. 31.
- 26) 戴内清, 科学史研究, 48(1), 1 (1958).
- 27) 沈括著, 胡道静校正, "夢溪筆談校証", 卷 26, 中華書局, 北京, 1959. pp. 874-875.
- 28) 中国科学院植物研究所南京中山植物園薬用植物組編, "江蘇省植物薬材誌", 第 1 版, 科学出版社, 北京, 1959, pp. 233-2344
- 29) 南京薬学院薬材学教研組集体編著, "薬材学", 人民衛生出版社, 北京, 1961, pp. 683-684.
- 30) 李中立, "本草原始", 卷 2, 1766年重刊本, 日本, 20丁. 李中立は1578年に「本草原始」を著したが、「本草原始」は清代に「本草綱目」を引用し大改訂を行ない³¹⁾ 内容を異にする。ここにいる本草原始は改訂以前のものである。
- 31) 李中立, "本草原始", 光緒間善成堂刊本, 卷 1, 1645, 31丁.
- 32) 李時珍, "本草綱目" 重刻本草綱目附図, 1603, 32丁.
- 33) 倪朱謨, "本草彙言", 卷之三図, 1645. 1丁.

Fig. 1



大觀本草

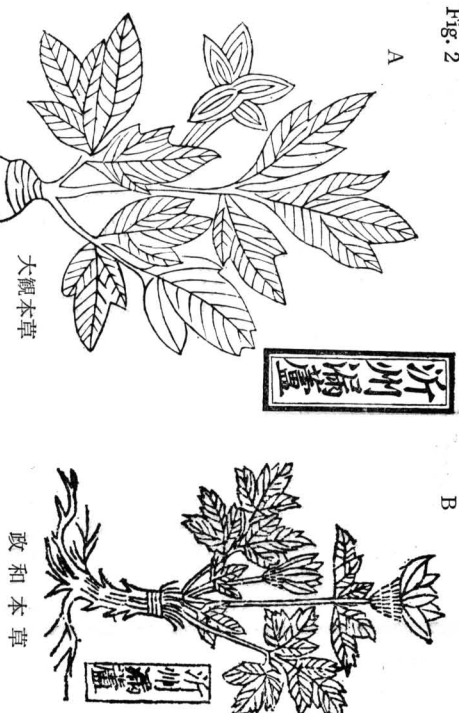
C



單州漏蘆

紹興本草

Fig. 2



大觀本草

C



沂州漏蘆

紹興本草

D

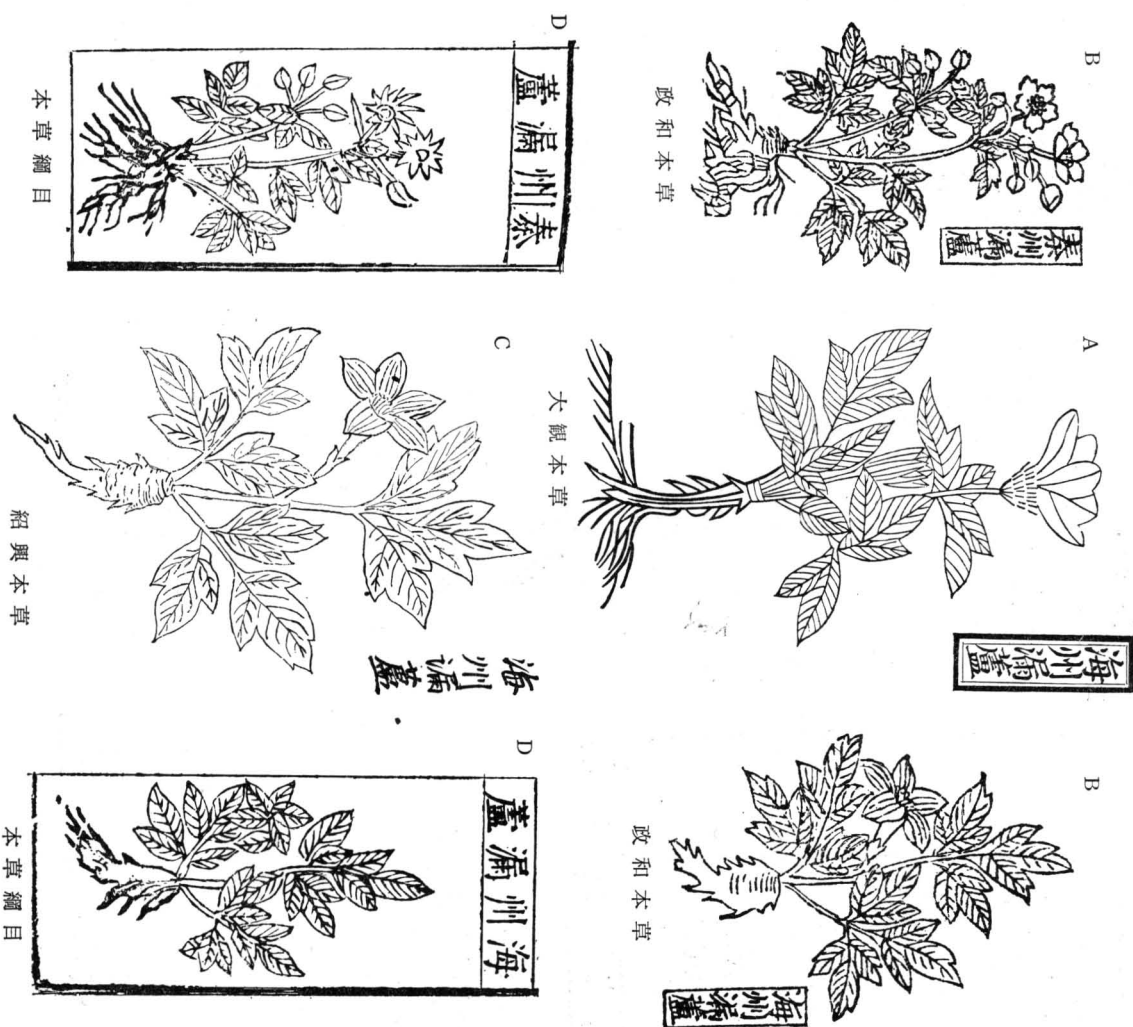


本草綱目

Fig. 3



Fig. 4



II) *Rhapontica uniflora* DC. を基源とする漏蘆および飛廉について

飛廉は「神農本草経」¹³⁾ の上品に、「味苦平主骨節熱腫重酸疼久服令人身輕 一名飛輕」と記され、関節炎の発熱疼痛の治療薬として収載され、名医別録¹³⁾ には「頭眩頂重皮間邪風如蜂螫針刺魚子細起熱瘡癰疽痔濕痺止風邪欬嗽下乳汁」と記され、皮膚疾患、癰疽、痔疾、リウマチ、および乳汁分泌不足などの治療薬とされ、漏蘆と同一治療効果を記述している。また「一名漏蘆」とも記されており、別録にいう飛廉は別種の漏蘆で地方的に *Echinops latifolius* を基源とする真の漏蘆と同一薬効で使用されていたと思われる。

植物形態に関しては、陶隱居¹³⁾ は「惟葉下附莖輕有皮起似箭羽葉又多刻欠花紫色」といい一般にほとんど用いられないと云っている。江戸時代の日本の本草家達は莖に翼があるということからヒレアザミ *Carduus crispus* L.³⁴⁾ に充てた。「植物名実図考³⁵⁾」の飛廉は *Carduus* sp. の図 (Fig. 8-B) をあげ、医家ではあまり用いられていないが、瀋地方の人々は寒熱、毒瘡に用いていると記している。この図 (Fig. 8-B) について牧野³⁶⁾ はヒレアザミではなく *Saussurea* 属の一種ではないかと想像すると云い、ヒレアザミは一年草で名医別録にいう「正月採根」は不可能であると云っているが、ヒレアザミは越年草で正月でも採根可能なことから牧野の説は肯定しがたい。よって陶隱居のいう飛廉はヒレアザミを充てるのが妥当と思われる。薬効に関しては「枝莖可得長生」と記され、詳細なことは不明である。

蘇敬¹³⁾ は二種の基源の異なる飛廉があると云い、一つは陶隱居の説のものであり、一つは「生山崗上者葉頗相似而無疎欠且多毛莖亦無羽根直下更傍枝生則肉白皮黑中有黑脉日乾則黑如玄參」といい、葉に毛が多く、莖に翼がなく、根の内部は肉が白く、皮は黒く、中に黒脈があり、乾けば玄参のように黒くなるというもので、このものは現在中国で正品の漏蘆の一つとされている祁州漏蘆 *Rhapontica uniflora* DC. の形態⁴⁾, ³⁷⁾ に合致する。

また図経にあげられた4種の漏蘆の1つの海州漏蘆は「花紫碧如單葉蓮花花萼下及根傍有白茸裏之根黑色如蔓菁而細又類葱本淮南人呼為老翁花」と記され、花が紫色で、総苞や根の基部に白茸があるという特徴を述べている。海州は今の江蘇省東海県にあたり、分布上²⁴⁾ からも *Rhapontica uniflora* DC. を基源とすると考えられる。しかし江戸時代の日本の本草家達は海州漏蘆の図、記文および老翁花という地方名から白頭翁 (オキナグサ *Pulsatilla cernua* (THUNB.) SPRENG.

(*Ranunculaceae*)) であるとし疑わなかった。白頭翁に関しては図経³⁸⁾ に「正月生苗作叢狀如白薇而柔細稍長葉生莖端上有細白毛而不滑近根有白茸正似白頭老翁故名焉根紫色深如蔓菁二月三月開花紫…」とあり、海州漏蘆の形態ときわめて類似した記載をあげている。現に *Rhapontica uniflora* の根と *Pulsatilla* 属の根は、ともに根の基部に白茸があり、極めて似ている。華北や西北地方の一部では祁州漏蘆 *Rhapontica uniflora* を「白頭翁」と称しているし、また黒龍江、吉林省では *pulsatilla chinensis* REGEL または *p. dahurica* SPRENG などの地上の根端部を「白頭翁」といふ、地下部を漏蘆と称して市販しており⁴⁾、両者は混乱している。「日華子諸家本草¹³⁾」には漏蘆について「花苗並同用俗呼為鬼油麻形并氣味似乾牛旁頭上有白花子」と記載され、ここにいる漏蘆も *Rhapontica uniflora* を基源とするものであろうと思われ、「連翹為使治小兒壯熱通小腸泄精尿血風赤眼乳癰發背痺癰腸風排膿補血治撲損続筋骨傳金瘡止血長肉通經脉」と広範囲な治療効果をあげている。

34) 水島正美, 植研, 42 (9), 276 (1967).

35) 吳其濬, 「植物名実図考」, 中華書局, 北京, 1963.

漏蘆: pp. 269-270, 飛廉: pp. 270-271, 苦美: p. 352.

36) 白井光太郎監修, 「頭註国訳本草綱目」第5冊, 春陽堂, 東京, 1930. p. 129. での考定者・牧野富太郎の意見.

37) 徐国鈞, 袁昌齋, 周太炎, 婁鑑, 中藥白頭翁的生藥鑑定(続), 藥學學報, 6, 272 (1958).

38) 唐慎微, 「重修政和經史証類備用本」, 卷11, 草部下品之下, 人民衛生出版社影印本, 第1版, 北京, 1957. p. 270.

沈括^{25),27)}は閩中で用いられる漏蘆とは別に「今方家用漏蘆乃飛廉也飛廉一名漏蘆苗似芙苦根似牛旁綿頭者是也」と云い、「蘇沈良方²⁵⁾」には、漏蘆は関節炎の治療薬とされる「伊祁丸」や打撲症の疼痛に用いる「側子散」の処方中にみられ、とくに「伊祁丸」には「北漏蘆」と指定しており、*Rhapontica uniflora* が用いられたものと考えられる。

以上のことから北宋時代以前にも明らかに *Rhapontica uniflora* を基源とするものが地域的に漏蘆と称され、実はそれが正品の飛廉であったと考えられる。「名医別録」にあげられた飛廉の薬効と漏蘆の薬効が極めて似、「蘇沈良方²⁵⁾」に書かれた飛廉一名漏蘆（北漏蘆）は神農本草経の飛廉の薬効と符合し、また「本草綱目」に引用された宋代の李迅の書いた「癰疽集驗方」に収載されている「漏蘆湯」は一切の癰疽の治療薬とされ、処方中の漏蘆は白茸のあるものを用いよと記されており、当時からすでに *Echinops latifolius* および *Rhapontica uniflora* を基源とする漏蘆が一般に同一薬効で使用されており、李時珍も飛廉の項で「有白茸者乃飛廉無疑矣今考二

物氣味功用俱不相遠似可通用」とのべている。

飛廉と称される生薬はその後用いられた形跡がなく、李時珍は「本經別錄所列亦是良薬而後人不知用何哉」といい、明代以後の本草書は過去の記文をあげているにすぎず、*Rhapontica uniflora* を基源とするものはすべて漏蘆と称されるようになった。

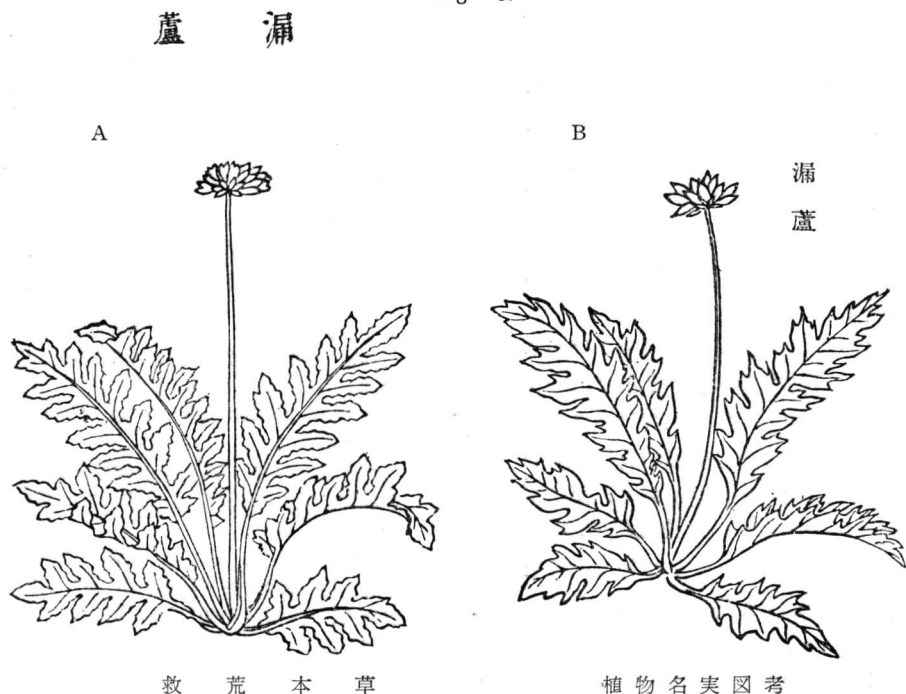
明代には漏蘆は「救荒本草³⁹⁾」に「苗葉就地叢生葉似山芥葉而大又多花又亦似白屈菜又似大蓬蒿葉及似風花葉脚葉而大葉攢葶上開紅白花」と記され、その形態図 (Fig. 5-A) からも *Rhapontica uniflora* に合致し、「植物名実図考³⁵⁾」には「今從救荒本草」と記し、「救荒本草」と類似した図をあげている。

1766 年日本重刊本の「本草原始³⁰⁾」の生薬図 (Fig. 6-A) は根の基部に繊維状の葉柄残基が付いており、*Echinops* 属を基源とするものであるが、清代の光緒間善成堂刊本の

39) 朱橚, “救荒本草”, 上巻草部, 1586 年刊本, 22 丁。

図は日本, 享保元年 (1716) 皇都柳枝軒等刊本, 巻一, 26 丁。から引用する。形態は明・萬曆 14 年 (1586) 刊本と全く同じである。

Fig. 5.



「本草原始³¹⁾」には根頭部に白茸の付いた生薬図 (Fig. 6-B) があげられ、「近芦頭有白茸」と添書してあり、本文中には「根傍有白茸裏之根黒色如蔓菁而細者即此也 今市通貨之医通用之予無見使苗」と記載されている。「本草思弁録⁴⁰⁾」にも「有白茸, 正与相合」とあり、清代には根頭部に白茸のある *Rhapontica uniflora* の根が漏蘆の正品として扱われていたと考えられ、このものは現在も中国で慣用されている。

III) その他の植物を基源とする漏蘆について A. *Leucothoe* 属を基源とする漏蘆

唐代以前には *E. latifolius* および *R. uniflora* 以外を基源とする漏蘆があるが真の漏蘆ではない。それは陶隱居¹³⁾が「今出近道亦有療諸瘻疥此久服甚益人而服食方罕用之今市人皆取苗用之俗中取根名鹿驪根苦摩以療瘻疥」と云っているもので、蘇敬は鹿驪は木黎蘆のことで、有毒で漏蘆ではないと反論している。陳藏器⁴¹⁾は木黎蘆の項で「漏蘆注陶云漏蘆一名鹿驪生山 南人用苗北人用根功在本経」と漏蘆を解説し、つぎに「木黎蘆有毒非漏蘆樹生如茱萸樹高三尺 有毒 殺蟲 山人以瘻疥用之」と木黎蘆は漏蘆ではないと断言しているが、証類本草¹³⁾の漏蘆の項には「陳藏器云按南人用苗北上多用根樹生如茱萸樹高二三尺有毒殺蟲山人洗瘻疥用之」とのべ、明らかに木黎蘆の説をのせ、陳藏器の説を誤まって引用している。しかし陶隱居の云う鹿驪の薬効と陳藏器のいう木黎蘆の薬効が似ている点から両者は同一物であろうと思われる。これらのことは熊谷玄随⁹⁾も指摘し、木黎蘆にハナヒリノキ *Leucothoe grayana* MAXIM. var. *oblongifolia* (MIQ.) OHWI (*Ericaceae*) を充てた。

鹿驪は lu-li, 木黎蘆は mu-li-lu, 漏蘆は lou-lu ときわめて似た発音なので混乱が生じたのであろう。また漏蘆と発音上混乱されやすい漢薬に藜蘆 lu-li がある。石戸谷の *Chinesische Drogen*⁴²⁾ にあげられた上海市場品の藜蘆の図は明らかに現在用いられている *Echinops latifolius* 禹州漏蘆と同一物である。また著者らが香港で入手した「藜蘆」の

Fig. 6.

Fig. 7.



中にも明らかに漏蘆とすべきものがあった。中薬志にも、藜蘆 (*Veratum* sp.) は漏蘆と

- 40) 周巖, “本草思弁録” 卷 2, 人民衛生出版社, 北京, 1904. p. 53
- 41) 唐慎微, “重政修和經史証類備用本草”, 卷14, 木部下品, 陳藏器余, 人民衛生出版社影印本, 第1版, 北京, 1957, p. 362.
- 42) T. Ishidoya, “Chinesische drogen” 11, 1937. p. 49.
- 石戸谷勉氏はこの生薬をキク科の *Scorzonera* 属のものであるとしているが、明らかに誤りである。

して市販されおり、有毒で危険なため注意すべきであると指摘している。

B. 図経に記された他の二種の漏蘆

1) 沂州漏蘆

沂州は山東省臨沂県にあり、図経に「花葉頗似牡丹」と記されている。熊谷玄随⁹⁾や小野蘭山¹⁴⁾などはこのものにキブネギク *Anemone hupehensis* LEM. var. *japonica* (TH. UNB.) BOWLES et STEARN にあてたが、柴田正簡¹³⁾は白頭翁(和名ゼガイソウ)にあてた。著者らは *Anemone* 属を充てるのが妥当であると考え、現に陝西省(西安以外)では野棉花(*Anemone hupehensis* LEM.)および秋牡丹(*A. japonica* SIEB. et ZUCC.)の根を漏蘆として用いている⁴⁾。

2) 秦州漏蘆

秦州は甘粛省秦安県東にあり、図経に「花似單葉寒菊紫色五七枝同一幹上」と記し、熊谷玄随⁹⁾はこれは馬蘭でその茎は深紫で、別録一名野蘭¹⁴⁾はこれであると云っている。齊藤東溪¹¹⁾は「救荒本草の六月菊、和名春菊」と云い、小野蘭山¹⁴⁾も同意見をのべている。図経の記載からは *Compositae* の *Aster* 属のようであるが、図は *Aster* 属とは考えられず *Rosaceae* か *Ranunculaceae* の植物を描いたものと思われる。

C. 苦芙について

苦芙は名医別録¹³⁾の下品に「微寒主面目通身漆瘡燒灰傅之亦可生食」と記され、顔面および全身の漆瘡の治療薬として収載されている。蘇敬¹³⁾は「今人以為漏蘆非也」といい、また飛廉の項で「今俗以馬薊以苦芙為漏蘆並非是也」と云っており、苦芙は漏蘆と別称されていたようである。形態的には韓保昇¹³⁾は「子若猫薊茎丹無刺」と云い、本草綱目には「中空莖頭有台似薊」と記し、*Cirsium* 属に似た図(Fig. 9-A)をあげ、「本草和名⁴⁵⁾」には「加未奈」一名加美於古之奈とあり、齊藤東溪¹¹⁾は「女阿佐美」と云い、小野蘭山¹⁴⁾は「ヒメアザミ」と云いいずれも *Cirsium* 属を充てている。

しかし「本草綱目」に引用された「造化指南」には「葉如地黃味苦 初生有白毛入夏抽莖

有毛開白花甚繁結細実 其無花実者名地胆草」と記されている。「地胆草」について、謝宗万⁴⁶⁾は「苦地胆⁴⁷⁾」のことであると、莊兆祥⁴⁸⁾の意見を入れ *Elephantopus scaber* L. (*Compositae*) の学名を採用している。「造化指南」の云う苦芙は、花期の根出葉の形状、および茎に白毛がある点で *Elephantopus* 属に類似し、特に花が白いことから *Elephantopus tomentopus* L. であろうと思われる。植物名実図考³⁵⁾にあげられた図(Fig. 9-B)は葉が対生で、茎に毛があることから *Eleutheranthera* 属、*Galinsoga* 属、*Siegesbeckia* 属などが考えられるが不明である。

苦芙は飛廉と同じく、これらを配合した処方は見られず、単味で用いられていたようである。現代では中薬志⁴⁾、药材学²⁹⁾などには記載されていない。

IV) 漏蘆を配合した処方について

漏蘆を配合した処方も多く、「備急千金要方⁴⁹⁾」、「千金翼方⁵⁰⁾」、「外台秘要²²⁾」などにあげられた処方で、化膿性皮膚疾患に用いられるものに漏蘆湯、升麻湯、漏蘆連翹湯、升麻犀角湯、升麻膏方があり、痔疾患に黃耆丸、乳汁分泌不足に漏蘆散、鯽魚湯などがあげられている。

中でも「漏蘆湯」は、晋代の「葛洪肘後備急方⁵¹⁾」にも収載されており、宋代では「太平惠民和劑局方²³⁾」に「千金漏蘆湯」として一切無名の化膿性皮膚疾患の治療薬として収載され、元代の「衛生宝鑑⁵²⁾」、明代の「万病回春⁵³⁾」、清代の「医宗金鑑⁵⁴⁾」など多くの医方書に伝えられた。しかし、それぞれ薬名と

43) 柴田正簡, 「日用薬品考」, 1810年, 45丁。

44) 野蘭という別名は、神農本草経に記載されており誤引である。

45) 深江輔仁, 「本草和名」, 寛政版(1797), 和泉屋庄次郎発行, 漏蘆, 飛廉: 7巻, 24丁, 苦芙: 巻11, 44丁。芍薬: 巻8, 26丁。

46) 謝宗万, 「中薬材品種論述」, 上冊, 上海科学技术出版社。上海, p. 138。

47) 「苦地胆」は趙学敏, 「本草綱目拾遺」, 巻4。草部, 清光緒張紹棠刻本, 商務印書館, 1954, pp. 124-125. に「葉可貼熱毒瘡」として収載されている。

48) 蕭步丹著, 莊兆祥増訂, 「増訂嶺南采藥録」上冊, 現代中医薬学院, 香港, 1964, p. 22。

Fig. 8

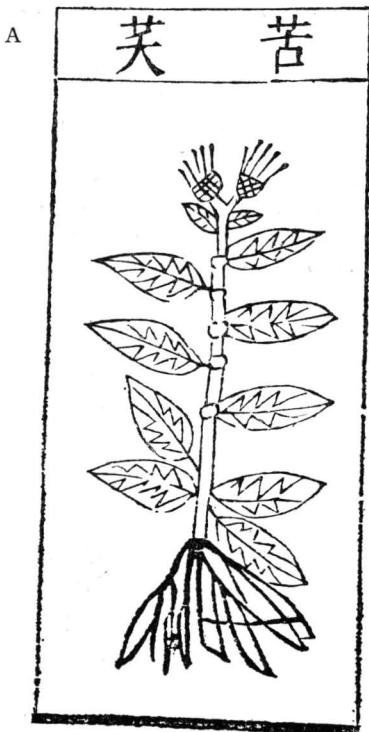


本草綱目



植物名実図考

Fig. 9



本草綱目



植物名実図考

薬量が多少相違する。

またわが国では最近、藤原宮(694~710年)跡の発掘調査が行なわれ、典薬寮関係の薬物の付札、薬湯の処方書付、および薬物請求の木簡が多数出土した。その中に「漏蘆湯」に関する木簡があり、岸ら⁵⁵⁾の解説によると、表

漏蘆湯方漏蘆二兩升麻二兩黄芩二兩大黃二兩 枳実二兩白朮二兩白微二兩芍薬二兩甘草二兩
--

裏

麻黄二兩漏蘆 親家親王 湯方兎糸子	本草
----------------------	----

とある。ここにあげられた「漏蘆湯」は「葛洪肘後備急方⁵¹⁾」にあげられた漏蘆湯(漏蘆白斂黄芩白薇枳実炙炙升麻甘草炙芍薬麻黄去節各二兩大黃三兩)と極めて似ており、処方中の大黃の量のみ3兩が2兩に変わっているだけである⁵⁶⁾。

それ故「漏蘆湯」は非常に古くからわが国でも実際に用いられていたと思われる。漏蘆は「本草和名⁴⁵⁾」には「久呂久佐一名阿利久佐」とあり、「延喜式⁵⁸⁾」の諸国進年料雑葉に山城、摂津、近江、若狭、丹波、美作、伊予の諸国から産出するという記載がみられるが、たゞ当時の処方に配合した漏蘆が何であったかは今のところ不明である。

結 論

以上のことから、古来漏蘆は中国各地で民

間的に多種類のものが用いられていたが、真の漏蘆は *Echinops latifolius* TAUSCH および *Rhapontica uniflora* DC. を基源とするもので、両者は同一薬効で使用されていた。

化膿性皮膚疾患、痔疾患、乳汁分泌不足などに応用される多くの処方中の漏蘆は、特別な指定がない限り両者いずれを使用しても同一薬効が期待できるものと推定する。

謝辞：本研究にあたり、文献閲覧の御便宜を与えて下された京都大学薬学部木島正夫教授、武田薬品工業株式会社宮下三郎博士、国立国会図書館支部上野図書館の諸氏に深謝する。

- 49) 孫思邈, "備急千金要方", 国立中国医薬研究所版, 台北, 1966.
- 50) 孫思邈, "千金翼方", 国立中国医薬研究所版, 台北, 1966.
- 51) 葛洪撰, "葛洪肘後備急方", 商務印書館, 上海, 1955, p. 148.
- 52) 羅天益, "衛生宝鑑", 人民衛生出版社, 北京, 1963, p. 126.
- 53) 龔廷賢, "增補萬病回春", 醫林書局, 香港, pp. 178-179.
- 54) 吳謙, "鑒宗金鑑", 大中国図書公司, 台北, 1968.
- 55) 奈良県教育委員会編, "奈良県史跡名勝天然記念物調査報告, 第25冊, 藤原宮, 国道165号線バイパスに伴う宮域調査, 木簡積文", p. 6 (PL. 62), 解説: 岸俊男, 和田 萃, 1969, pp. 92-105.
- 56) 木簡中の「芍薬」は「医心方(982年)⁵⁷⁾」で「衣比須久須利」と言い, これは「本草和名⁴⁵⁾」の「芍薬」の和名と合致するので, 「芍薬」は「芍薬」のことである。
- 57) 丹波康頼撰, "醫心方" 卷1, 浅倉屋蔵版, 人民衛生出版社, 北京, 1955, p. 26.
- 58) 藤原忠平ら, "延喜式", 卷37, 日本古典全集刊行会, 東京, 1929, p. 53.

ブラジルの民族生薬について

About local drugs in Brazil

橋 本 庸 平*

序 言

ブラジルは南米大陸の半分を占め、本邦の面積の23倍あり、高等植物数は現在まで約5万程知られており、人口も約1億で本邦人口に迫っている。最初ポルトガル移民によって開拓され、ついでヨーロッパ各国移民、近年は日系移民も混血しているが、日系は全人口の1%に満たない。したがって、国語はラテンアメリカ中、唯一のポルトガル語であり、スペイン語諸国にかこまれ特異の存在をなしている。ただし、ポルトガル語はスペイン語とよく似た言語である。以上のような各種移民以外に、モンゴロイド系といわれるインジオならびに最初奴隷として連れて来られたアフリカ移民が更に混血し合って、複雑な、いわゆるブラジル人を形成している。このような人種構成はアルゼンチン、チリー、ウルグァイなどの温帯地方にある白色人種国を除き、ほとんどのラテンアメリカ諸国に共通し

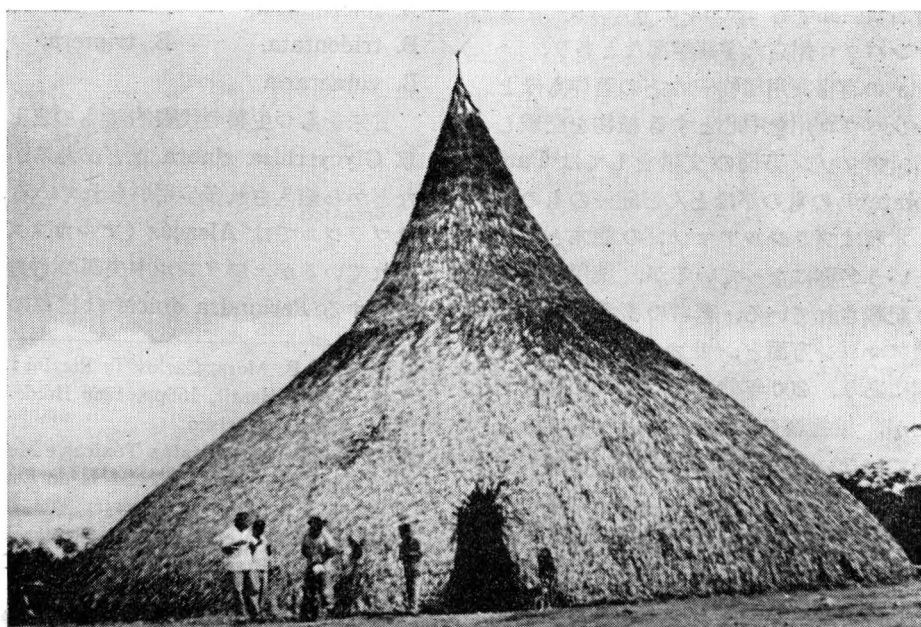
ている。

南米一の大国ブラジルにおける民間生薬の構成はかなり複雑であって、ポルトガル本国にないブラジル語の語彙が8,000語以上あるといわれている通り、生薬もヨーロッパにまったく存在しないものの方が多い位である。またインジオたちが古くから用いていたものも加わり、一方アフリカ人がもたらした種子がブラジルで生育している例も少ない。インジオの要素は北ブラジル、すなわちアゾニア方面に多くみられ、またアフリカの要素は奴隷がもっとも沢山はいったバイア州に顕著に残っており、近年日本移民の手によって栽培されつつあるチョウジなどはその好例である。

* 神戸女子薬科大学

ブラジル国立農業技術研究所教授 (1953～1955),

同国立バイア大学教授 (1969～1970) いずれも国連技術拡大計画による



ピ ア ロ ア 族 の 家

ブラジルの生薬、薬用植物にかんする文献は前世紀から少しづつあらわれているが、今世紀に及んで出版されたまとまった文献のすべてはポルトガル語であって 斯学者にとって読み難いきらいがある。英語のもので米国で出版されたモルスらの「ブラジルの有用植物」⁽¹⁾にはかなり、薬用植物が収載されているが、本著は比較的簡単である。ただし、モルスは植物化学者としては同国で第一人者であり、共著者リジニは分類学者であるので内容は信頼されている。その他、ブラジル薬局方にはかなりの生薬が収載されているが、全文がポルトガル語であることはいうまでもない。最初にのべたように広大なブラジルには各地方に固有の生薬が沢山あり、地方名だけでその原植物を知ることには一般に困難である。この国のあらゆる都市にある中央市場また広場で週 1 回位ひらかれる野天市場にはかならず民間薬草売場があり、その地方特有の民間薬草が売られているが、これらのうちまだ専門家によって固定されていないものも少なくない。ブラジルでもっともよく開発され、またこの 1 州で GNP の半分を占めるといわれるサンパウロ州の場合は例外であり、かつては著名な生薬学者 Richard Wasicky をもったサンパウロ州立大学薬学部などあり、Hoehne の有毒薬用植物⁽²⁾などの著作もほとんどサンパウロ州を中心とする植物を記載している。アマゾン方面の文献としては Paul Le Cointe⁽³⁾のものがほとんど随一のものである。本著はブラジリアマゾンの樹木と有用植物という名称になっているが、薬用植物もかなり記載されている。著者の勤務したパイア州はアマゾン方面と、リオ、サンパウロその中間にあり、200 年前はブラジルの首都であったが、植物調査はアマゾンよりもずっと行届いていないといわれ、見るものすべて研究対象と云った有様であった。著者は 2 回にわたるブラジル滞在、その他学会出席など数回の訪問によって通算 3 年以上ブラジルに生活したわけであるので、ブラジル各地及びコロンビア、ベネズエラ、エクアドル、ペルー

などアマゾニア各地の隣接部を調査し、とくにコロンビアには約 1 年半在任したこともあり**、集めた葉も腊葉も 1 万点近く、試料も未整理のまま累積しているものが多い。

以上のような事情のため、比較民族生薬学の見地から、ブラジル民間生薬の全ばんにわたってのべることは只今できないので、そのうち代表的な 2, 3 群の生薬を選んで今回は報告することにする。

苦味および甘味をもつ生薬

苦味健胃薬としては本邦ならびに欧米では *Gentiana*, *Swertia* などのリンドウ科植物が用いられるが、ブラジルの比較的涼しい地方、たとえばサンパウロ州の標高が少し高い地方にはキク科の *Baccharis* 属が存在し、これらの多くのものは苦味をもち *Baccharida* または *Bacchante* と呼ばれ、健胃剤に供され 1955 年頃には製剤も市販されていた。成分はまだ不明である。薬用に供される植物名としてつぎの諸種が挙げられている。著者は *B. genistelloides* の腊葉を保存している。

<i>B. articulata</i> ,	<i>B. brasiliana</i> ,
<i>B. cordifolia</i> ,	<i>B. gauchuchandiana</i> ,
<i>B. genistelloides</i> ,	<i>B. macrodonta</i> ,
<i>B. microptera</i> ,	<i>B. occharacea</i> ,
<i>B. tridentata</i> ,	<i>B. triptera</i> ,
<i>B. vulneraria</i>	

甘味をもつ生薬の代表的なものとしては甘草 *Glycyrrhiza glabra* などがあるが、欧州などから輸入され多少用いられている。甘草はブラジルでは *Alcaçúz* (アルカスズ) とよばれているが、ブラジル中央部の砂地などに自生する *Periandra dulcis* は甘草のように

- (1) Walter B. Mors, Carlos T. Rizzini : Useful Plants of Brazil, 166pp. 1966 Holden-Day Inc. San Francisco
- (2) F. C. Hoehne : Plantas Tóxicas e Medicinais. 355pp. 1939, Dept. Botânica do Estado, S. Paulo
- (3) Paul Le Cointe : Árvores e Plantas Uteis da Amazônia Brasileira, 1934, Livraria Clássica, Belém

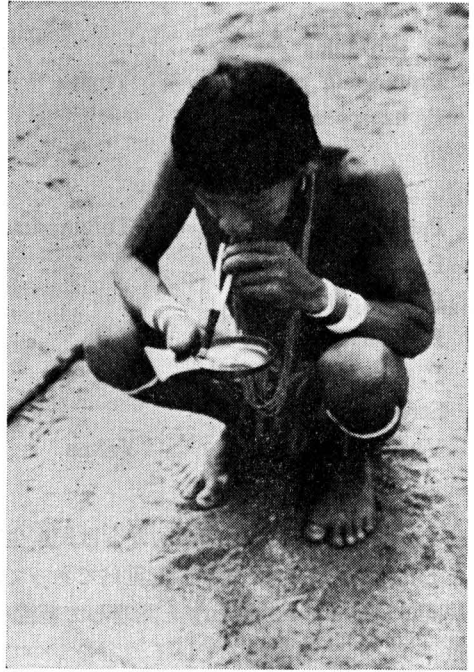
** コロンビア国立サンタンデル工業大学教授 (1963~1964, 1966) 国連特別基金による

Papilionatae に属し、青色の美しい花をつける。甘味は甘草より少なく、産地によるとかなり苦味をもっている。これらのブラジル産野生甘草は *Alcaçúz da terra* (アルカスズダ テラ) と現地ではばれ、住民は甘草と同じように咳止めに利用している。国立農業技術研究所(当時農芸化学研究所)にいた Machado らはグチルリチン0.34%を含有すると報告しているが、疑問がある、著者は本生薬をブラジル甘草と呼んでいる。

幻覚生薬群

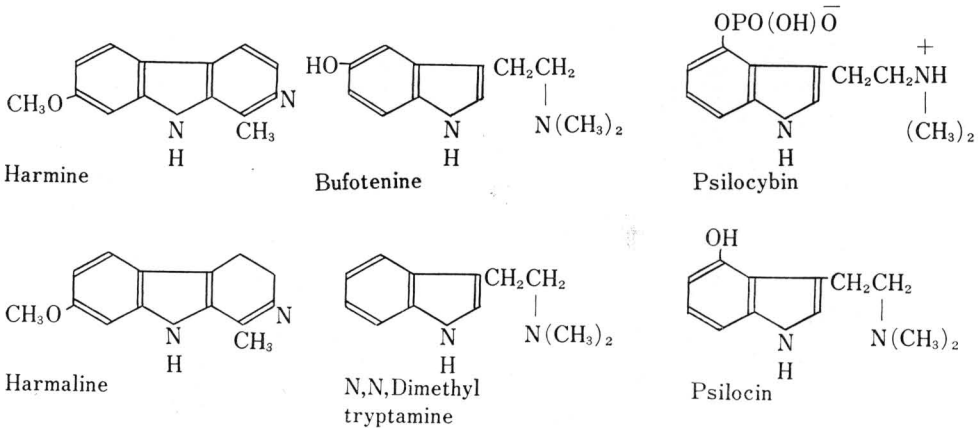
アマゾニアのインジオでも裸族と呼ばれる原始的な部族は LSD 25 のような幻覚剤をもっている。LSD と共通している点はこれらが、みなインドール系アルカロイドを含有している点である。その主なものは Bufotenine を含有する マメ科の *Piptadenia peregrina* (種子) などおよび Harmine, Harmaline を含有する キントラノオ科の *Banisteriopsis caapi* などである。ブホテニンとはガマの毒として知られ、メキシコにはよく似た Psilocybin, Psilocin を含むキノコ *Psilocybe* 属があって、やはりインジオが原始宗教に関連し

て色彩幻覚剤として儀式に用いている。N, N, Dimethyltryptamine も *Piptadenia* 属などに見出され、やはり幻覚成分として知られている。



Piptadenia を吸うピアロア族

Structures of Hallucinogenic alkaloids



このようにアマゾニアのインジオは LDS 様の幻覚剤を常用するが、*Banisteriopsis* の方は煎用し、*Piptadenia* spp. の場合は種子粉末をタニシの貝殻を焼いてつくった石灰と

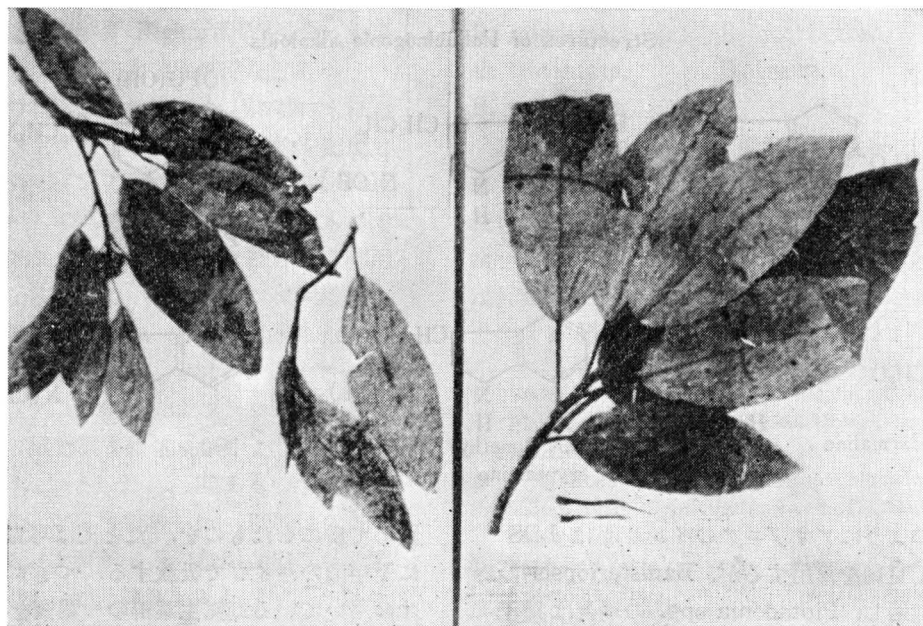
固めて粉にしたものを、たとえば写真のように Y 字型のパイプで吸飲する。つぎにインジオの用いている幻覚生薬群の一覧表を示す。

HALLUCINOGENIC PLANTS

Botanical Name	Native Name	Family	Occurrence	Component
Banisteriopsis caapi	Caapi	Malpighiaceae	Colombia	Harmine, Harmaline
B. inebrians				
B. rusbyana				
B. guitensis				
Piptadenia peregrina	Yopo	Leguminosae	Brazil	Bufotenine
P. macrocapa				Bufoteninenin-N-oxide N, N, Dimethyltryptamine N, N, Dimethyltryptamine-N-oxide
Psilocybe mexicana	Teonanacatl		Mexico	Psilocybin
P. aztecorum		Fungus		Psilocin
P. semperviva				
P. caerulescens				
P. zapotecorum				
Stropharia cubensis				
Virola calophylla	Yakee	Myristicaceae	Panama, Brazil	unknown

アマゾニアの *Piptadenia* などは民族生薬としてももっとも興味のある幻覚剤であって、民族植物学 *Ethnobotany* と関連して著者が、数年来研究を続行している問題の1つである。ブラジルの *Piptadenia* 中インジオが幻

覚剤として用いているものは *P. peregrina* にほとんど限られている。しかし、従来の報告によれば *P. colbrina*, *P. macrocarpa*, および *P. communis* の3種にはブホテンニンなどを含有しているが、これら3種はブラジル

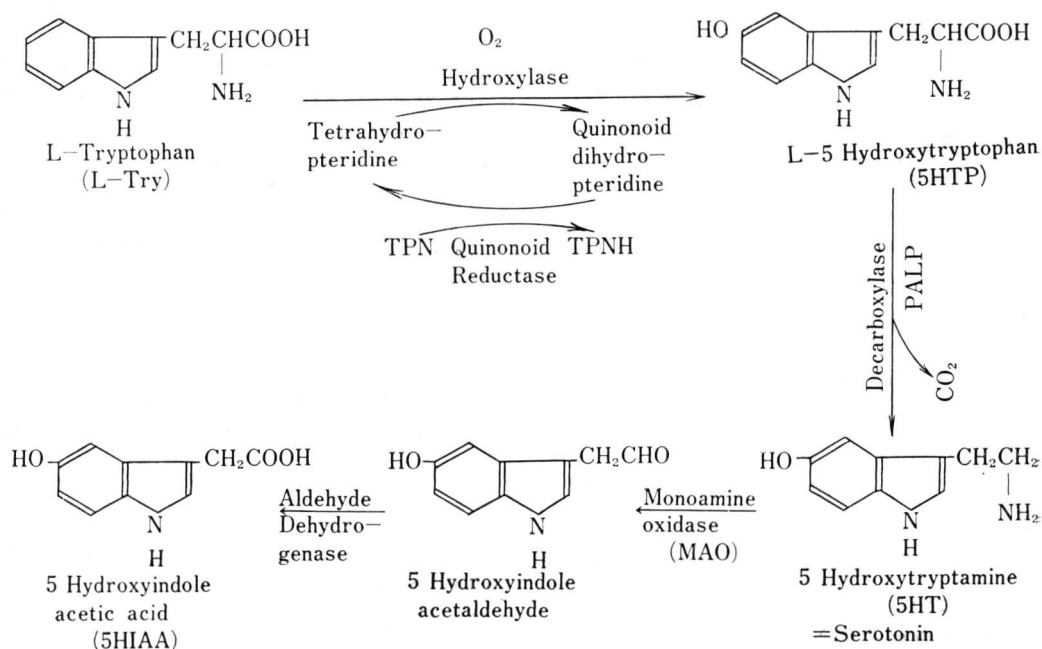


Ficus anthelmintica

中央部,あるいは南部の涼しい方面にも存在し,幻覚剤としてはまったく用いられていない。この点から考えると植物成分の上からの分類学,すなわち *Chemotaxonomy* の結果はかならずしも *Ethnobotany* の事実と一致していないことがわかる。著者は全ブラジルで知られている30余種の *Piptadenia* のうち約10種を採集することができたので,それらの種子を微量化学的に検したところ,その大

部分がブホテンニンなどを含有することを知った⁽⁴⁾。

著者らは京大医学部医化学教室 早石修教授らと共同で幻覚生薬成分が,神経伝達物質であるといわれているセロトニンの生合成および,その分解経路にどのように影響するかを研究し,その一斑を知ることができた⁽⁵⁾。セロトニン生合成ならびに,その分解経路は従来つぎのようであることが知られている。



著者らの実験の結果,これらの幻覚成分がセロトニン生合成経路における水酸化酵素ならびにその分解経路におけるモノアミン酸化酵素(MAO)にたいし,とくにハルミンならびにハルマリンが顕著な阻害を示すことがはじめて明らかになった。したがって,幻覚剤は精神作用に関連をもつとみなされているセロトニン濃度に影響を及ぼすことがわかり幻覚成分の作用機序の一端についてうかがい知ることができるようになった。南米諸国の

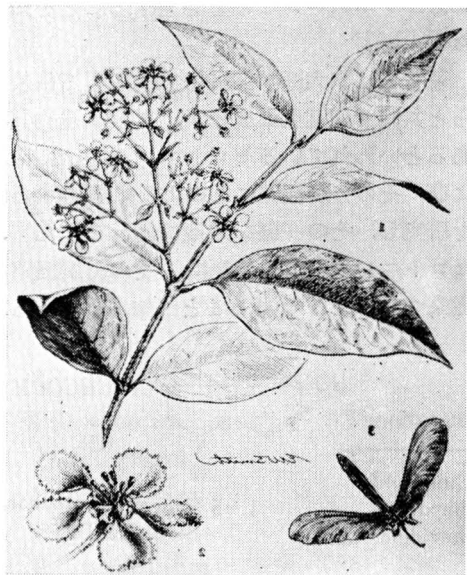
民族生薬のうちもっとも代表的ともいえる幻覚生薬の作用機序について,著者らはこのように研究を試みる機会をえたのである。

強 精 剤

ブラジル産の *Aphrodisiacs* のうちもっとも著名なものは *muira-puama* としてブラジル薬局方に収載せられている *Ptychopetalum olacoides* の根茎である。本植物はボロボロノキ科 *Olacaceae* に属し,主としてアマゾン上流方面の流域に産する。住民はこれをピング(サトウキビからつくったラム酒の1種)に浸して飲用するが,西独ならびに本邦の市販薬にも,この生薬を配合しているも

(4) 橋本庸平,加藤篤,山里昶子,高橋純子:第20回日本薬学会近畿支部総会講演(神戸 1970,11月)

(5) 橋本庸平,川西和子,市山新,早石修:日本薬学会大会講演(名古屋,1969,4月)



Banisteropsis caapi Morton
(Schultes による)

のがある。有効成分は不明であるが、最近岩佐ら⁽⁶⁾によれば、トリテルペノイドのルペオール、またガスクロマトグラフィーによってカンペステロール、 β シトステロールならびにベヘン酸など脂肪酸の存在が報告されている。ブラジルの古い文献によればヨヒンビン様の *muirapumamine* というアルカロイドが存在するというが、著者らの研究によれば⁽⁷⁾、微量のアルカロイドは十数種から成っていることが判明した。また著者らは微量のクマリンの存在を認めた。

ブラジルの民間で強精薬として用いられているものがいろいろあるが、上記ムイラプア

マ以外で、もっとも著名なものにカツアバ皮 (*Catuaba*) がある。本生薬の原植物には数種あることが推定されているが、いづれも中央ブラジル、東北ブラジルのバイア州などに産し、一般に赤色の樹皮をしており、前記のピンガに浸すと赤色を呈する。成分として確実なものはまだ報告されていないが、原植物として一番多いものが *Bignoniaceae* に属する *Anemopaegma arvense* である。

駆虫薬

ブラジル全土にわたって蛔虫症などが多いことが知られているが、医師はサントニンの名を知らない。ブラジル北部、アマゾン方面で住民の間で知られているのは野生のイチジク属であり、その乳液は寄生虫を殺す作用がある。その主なものは *Ficus anthelmintica* などであり、*Figueiras bravos* (野生イチジクの意) と呼ばれ駆虫薬に供せられる。あるブラジル地方研究所の報告に、本植物がアントニンを含むというものがあり、*Chemotaxonomy* の上から疑わしいので、この植物をはじめ、ブラジル、コロンビア産の *Ficus* 属約50種を集めて、サントニンの存否を微量化学的に検したところ、まったくサントニンを認めなかった。⁽⁸⁾ これら *Ficus* 属の乳液は塚詰にして、コロンビア国の薬局で販売されている。

(6) 岩佐準三，木村嘉孝：薬誌89，1172，1969

(7) 橋本庸平，山口ルリ子：未発表

(8) 橋本庸平，Hernando Garcia-Barriga：薬学会例会講演（京都，1960，1月）

アフリカ北部の生薬と生薬療法

長 沢 元 夫*

Motoo Nagasawa : Herb Medicines and their Drugs in Northern Africa.

民族薬物に関する考察は、古くから使われているものでなければならないとか、その民族に固有のものでなければならないとか、外来のものは除外するなどという発想から行なってはならないのであり、それは民族医学(伝統医学)に対する立場と全く同じである。外来のものでも、長い年月にわたり使用されると、経験の集積により特殊な使用法が発見されたり、その民族の生活に即したものとなって民族医学の体系の中に組み入れられたりするからである。

アフリカ北部で、私が生薬をしらべて歩いたのはソマリランド、エチオピア、スダン、アラブ連合であるから、正確に言うとなアフリカ東北部である。

古代エジプトの医療については詳しいことはわかっていない。使用した薬物の名称はかなりわかっているが、治療体系がわからない。そこで紀元前のそれほど遠くない時代から考察を行なってみたい。この地域に生活している種類はアラビヤ人、コプト人、ヌビア人、アムハラ人、ガラ人などを主とする。古代エジプト人に最も近いのはコプト人とヌビア人であるといわれている。

コプト医学(Coptic Medicine)というといかにも古代エジプト医学の流れのように思われるが、実際は古代ギリシャ医学の流れに属する。コプト人とは「キリスト教徒のエジプト人」とも称される人々であり、エチオピアのアムハラ人もキリスト教徒であり、これらを *coptic* と言うのである。7世紀頃からアラビヤ人がこの地域に侵入してきて、アラビ

ヤ文化を移植したために、コプト語は現在は死語となり、祈禱の時に用いられているだけである。コプト医学の運命については資料不足でよくわからない。

一般のエジプト人、ヌビア人、ガラ人は回教徒であるからアラビヤ文化圏に入っている。アラビヤ医学(Arabic Medicine)もギリシャ医学(Greek Medicine=Hippocratic Medicine)の流れに属しているので、コプト医学と同系統である。

さてサハラ地域で下剤として用いているのはアレキサンドリア・センナとイヌセンナ(*Cassia obovata*)である。この地域にこの2種のセンナが多くはえているからである。これに対しコプト医学で下剤として用いるのはスカンモニアとアロエである。両種ともこの地域に生じているものではない。スカンモニアはギリシャ、小アジア産のヒルガオ科植物の根であり、アロエはアフリカでも南方ほど多いユリ科植物であるが古代エジプト医学ですでに使用している。ここにコプト医学の特色がでてるように思われる。

エチオピアの山中で、アムハラ族の一少年から、オオバコの葉をもんで、汁とともに切傷、おできに用いることを教わり、オオバコ類の葉のこの使い方が世界共通であることを強く印象づけられた。しかし植物相はヨーロッパやアジアと全く異なっているので、薬物として共通なものとは極めて少ない。類似種の場合でも、イブキジャコウソウに近縁な *Thymus serpyllum* を淋病、堕胎薬に用いるというように使い方は一致していないもの

* 東京理科大学薬学部

が多い。

これらに対し、以前から興味をもたれているのは、植物が全くちがっているのに、使い方が同じである種類で、Hartwig がこの関係を *Parallelpflanzen* といい、Tschirch が *Paralleldrogen* と称したものである。この地域に生育しているものでは次のものが有名である。

Coffea arabica (コーヒー) …… 中国の
Thea sinensis (チャ)

Catha edulis (カト, チャット) …… 東南
アジアの *Areca catechu* (ビンロウジ)。

南アメリカの *Erythroxylon coca* (コカ)

Hagenia abyssinica (コソ) …… ヨーロッパの
Dryopteris filix-mas。

Phoenix dactylifera (ナツメヤシ) …… ユー
ラシアの *Zizyphus jujuba* (ナツ
メ)

Cassia alexandrina (センナ) …… 中国の
Rheum palmatum (ダイオウ)

Viverra civetta (ジャコウネコ, civet) ……
アジアの *Moschus moschiferus*
(ジャコウシカ, musk)。

以上の見方は興味深いものであり、私自身このような立場でこの地域の生薬の調査を行った。しかしこの地域の医療の現状を見て以来、この見方には毒が含まれていることを反省するようになった。これは植民地として

みる目ではないかと、薬物や食品の原料を求める見方ではないかと。

後進地域が世界経済に参加するはじめの形は原料の提供であろうが、その土地の人々の生活が真に向上するためには自立的な農業、工業の発達がなければならない。わが国が今まで行ってきた経済援助、技術援助は日本産業のための原料資源の確保に主として使われ、その結果、現地のナショナリズムと対立する傾向が生じていると報じられている。生薬の研究がこれと同様であってよいはずはない。

この地域にある診療所、病院はすべて西洋医学の導入によって運営されている。この中に民族薬物、民族医学が参加し、疾病の克服に役立つことを、生薬研究の第一義とするならば、調査の方法にも根本的な反省が必要であると感じた次第である。

参考文献

- Till, Walter C : Die Arzneibuch der Kopten. 1951.
: Koptische Rezepte, 1946~7.
Field, M. J. : Religion and medicine of the Gã people, 1937.
長沢元夫 : エチオピアの薬用植物, 1966 (アフリカ研究 第 3 号)

アイヌの薬^{1*)}三 浦 三 郎^{2*)}

An opinion about racial drugs—Ainu drugs.

Sabro MIURA

Research Laboratory Yamanouchi Co., Ltd.

Ainu is a race of primitive life that had collapsed by contact with modern civilization comparatively lately. A description is given about a part of drugs Ainu had used commonly in their community.

一般に医薬は宗教的な呪物や祭祀に附随する祭具と見做されるものを除き、成立の上から経験法則的に生活資料に定着している自然発生的な薬物と、科学的考察のもとで創製された薬物とに分けることが出来る。一方、これらの医薬を伝播の範囲から、部族薬物、民族薬物、世界薬物とに分類することも可能である。

伝播の範囲という部族薬物とは原始および未開社会に使用される薬物であり、民族薬物とは血縁、文化的伝統、習俗など一定の枠組のなかでのみ使用される薬物である。また世界薬物とは人種、言語、国家の境界などにかかわらず、その利用が国際的に普及していく種類の薬物である。

このうち民族薬物についてその比較論を展開するには、まづその地域の風土性、すなわち原生自然へ対処していく人間社会の動き方に現われている文化のパターンや、その発展を規制している諸因子などを調べておくことが前提である。

わが国北海道の先住民であるアイヌは比較的最近まで狩猟漁撈の原始生活を営む民族であったが、近代文明と接触するに及んで急速に近代文明に同化された民族である。すなわち、明治2年(1869)蝦夷地は北海道と改称され、明治政府の出先機関である開拓使が設置された。以来、アイヌが生活の基盤にして

いた原生自然が次から次へと破壊され、ためにアイヌが従事していた蒐集経済の維持も不能になった。加えて移住和人との混住を強制され、雑婚が奨められ、教育によって言語、風俗、習慣、信仰などすべてを改めさせたがため、現在のように種族としても、また民族としてもその存在の維持を不可能にする基がこの次点において形成されている。

このように蝦夷地の自然に依存していた原生アイヌの基層文化は、一朝にして近代社会に埋没するに至ったが、幸いにも生活慣行に定着していた医薬の実態を察知するに可能な資料が、文化人類学の分野の人々の手によって集録されていた。¹⁾

本報はそれらの資料に基いて、原生アイヌの生活共同体において慣用されていた薬物の一部について考察しようとするのが目的である。

アイヌの使用薬物にみられる若干の特異性

a) 度量衡は目分量で決める。

重い大腸カタルにはアキグミの枝、ナワシロイチゴの枝、ダイコンソウの枝を等量ずつまぜ、片手いっぱい握り、両端を切りすて、残った約9cmの長さのものを約1升の水が半分になるまで煮つめて、その濃い煎液をひまなしにのむ(ホロベツ)

b) 胆汁の使用

胃腸病；カワウソ、イヌ、クマ、アザラシ、トドなどの胆汁をのむ(カラフト)

1*) 日本薬学会第81年会(1961)、第90年会(1970)に報告

山之内製薬(株)中央研究所^{2*)}

2*) Location: Azusawa 1-1, Itabashi, Tokyo

1) 知黒真志保；分類アイヌ語辞典、1—3巻、日本常民文化研究所(1953)

(リウマチ) ; タラの胆汁を患部につける
ウソロ)

ねんぎ; クマまたはタラの胆汁をぬる (ホ
ロベツ)

c) 動物の脂肪 (植物油は知られていない)

火傷; 紫根をかんで砕き, イヌ, ウマ, クマ
の脂にまぜて塗る

あかぎれ; キツツキ, カメ, シギ, クマ, ム
ジナ, カワウソの脂をつける (ホ
ロベツ)

ササの黒焼を上記の油で練ってつ
ける (ロホベツ)

扁頭腺炎; クマの脂を患部にぬる (ホロベツ)

耳 痛; シギの脂を耳の中にいれる (カラ
フト)

はれもの; ナメクジの黒焼を熊の脂で練って
ぬる (ホロベツ)

d) 薬物の加工度

アイヌの薬物は農産一次加工品である生薬と
違って, 保存性は考慮されてない. 食料品と
共通しているもの以外, 乾燥して貯蔵される
薬物としてイチイ, イラクサ, クルマバソ
ウ, エゾオグルマ, カスベ, ヤマシャクヤ
ク, レンリソウなどが知られている.

アイヌの薬物にみられる動物性薬物

アザラシ

胸の骨の痛み; アザラシやイヌの肋骨の浸
液を患部にぬり またはのむ.

胸 痛; 胸骨を薬にする (カラフト)

臍の固りの痛み; 十二指腸をはる (ウソロ)

イソギンチャク

乳のはれ; 浸液で冷湿布する (カラフト)

イヌ

みけんの痛み; イヌやウサギの前頭部を薬
にする (ウソロ)

胸の骨の痛み; (前出)

イモリ

足の痛み; イモリやカラスの黒焼をぬる
(トカチ)

ウサギ

排 膿; 毛皮を患部に当てる (カラフト)
腎臓病; ウサギやカワウソの腎臓がきく

(ウソロ)

胸や腹痛; 頭骨を煮てのむ (トカチ)

みけんの痛み; (前出) (ウソロ)

火 傷; 糞の黒焼をぬる (トカチ)

はれもの; 皮をはる (タラントマリ)

ウニ

いぼ痔; ウニの歯をとってつける (シラウ
ラ, マカオ, ウソロ)

カエル

火 傷; 腐敗した卵をぬる (カラフト)

カラス

足の親指の痛み; 黒焼をぬる (カラフト)

カスベ

気管支カタル; 口唇の干物の浸液でうがい
する (カラフト)

ワカウソ

胃 病; 脂をのむ (カラフト)

産後の衰弱; 腸を煎服する (カラフト)

痔 疾; 腸の煎液で患部を洗う (カラフ
ト)

腎臓病; 腎臓が効く (ウソロ)

腸 炎; 胆汁をのむ (カラフト)

あかぎれ; 脂をぬる (ホロベツ)

キツツキ

歯痛み; くちばしで突いて瀉血さす (ホロ
ベツ)

キネズミ

リウマチ; 内臓を除いた黒焼を用う (カラ
フト)

頭の痛み; (同上)

クマ

胃腸病; 胆汁をのむ (カラフト)

ねんぎ; 胆汁を塗る (ホロベツ)

扁頭腺炎; 腸の煎液をぬる (カラフト)

火 傷; 脂のないときは, 干してある腸の
煎液をぬる (カラフト)

難 産; 干した小腸を少し飲ませる (ウソ
ロ)

頭の痛み; 骨を削って幣に包み頭に当てる
(ウソロ)

脳味噌を生または煮て食べる
(タラントマリ, ウソロ)

視力衰弱；目玉を食べる（ピホロ）

コウモリ

不妊症；生血を飲ます（ウソロ）

難産；腹をなでる（ウソロ）

シギ

あかぎれ；脂をつける（ホロベツ）

耳の痛み；脂を耳の中へ入る（ホロベツ）

タコ

頭痛；タコを用う（トカチ）

ナメクジ

はれもの；黒焼をクマの脂で練ってぬる
（ホロベツ）

ニシン

手首の病む病氣；頭をかんでつける（ウソロ）

ハチ

火傷；巢の黒焼を脂で練ってぬる（ホロベツ）

ヒトデ

胸が苦しく吐気のある病氣；ヒトデを用う
（ウソロ）

ヘビ

咯血；胆嚢や心臓を飲ます（ウシヨロ）

えぼとり；脱殻でこする（ホロベツ，ピホロ，ナヨロ）

ホヤ

離乳；ホヤの肉で乳房を冷罨法す（カラフト）

ムシナ

あかぎれ；脂をつける（ホロベツ）

モグラ

はれもの；薬に用いる（マカオ）

ヤツメウナギ

頭の痛み；薬に用いる（ウソロ）

アイヌの薬物にみられる漢方的な用例

ムラサキ

- 1) 蟾酥の汁が目に入ると赤く腫れ盲いる。紫草の汁で洗い点ければ消える（本草綱目）

眼病にはムラサキを水に浸して附ける
（十勝日誌）

- 2) 火傷には紫雲膏を用う（漢方）

ムラサキの根を乾して貯わえ、よく噛ん

で細かにし、犬・馬あるいは熊の脂にまぜて火傷に塗れば卓効がある（十勝日誌）

アイヌの療法と日本の民間療法との類似点

- a) 温石の使用（シラウラ）

- b) 黒焼の使用，アイヌはハチの巢・ドクゼリ・ダイコンソウ・サンザシ・ツクパネソウ・キネズミ・イモリ・ガマなどを黒焼の原料にしている。

- c) 浴湯料の使用

ヨモギを用いる（タラントマリ）

- d) 吸入剤の使用

風邪のときヨモギを煮てその湯気を吸う（チトセ）

- e) 薫烟料の使用

耳の痛みにヤマシヤクヤクの実を煙草に混ぜてその煙を吹きこむ（ウス）

- f) サクラの皮を解毒に用う

魚肉・茸の中毒にヤマザクラの白内皮を嘗める（ホロベツ）

- g) カニを皮膚病に用う

皮膚のかぶれにカラを用う（シラウラ）

- i) 湿布

ニレやニワトコの掻き棉（Rochi）を用いる（各地）

- j) あかぎれにクマの脂

熊野伝三膏薬・徳兵衛膏薬などは内地でも慣用されていた。

むすび

アイヌは東アジアに個有な農耕文化の展開物である麴を持たなかったため、彼等の酒嗜好を唾液酒・果実酒・樹液酒に頼っているように、使用薬物の種類も地域社会の自然的生産要因の規制を受け、しかもその伝播は他の生活共同体に及ぶものは殆んどみられない。

また、地域社会における一つの薬物が、他の数種類の疾病に共用されている例も多い。

以上、要約すればアイヌの薬物は成立の上からは、自然物を経験法則的に利用した自然発生的なものであり、また伝播の上からは生活共同体における血族中心の部族薬物に属するものである。また被包材料なども木の掻き棉（Rochi）を用いているように、文化的にも未開社会の薬物である。

インド、ネパールの民族薬物について

伊 藤 和 洋*

インド、ネパール、セイロンなど約6億の人々の民族医学として、現在も広く行なわれているのはアユルヴェーダ医学である。そういう意味で、今回アユルヴェーダ医学で用いている薬物について語ることがは標題のことにについて記すことになると考える。

アユルヴェーダのアユルは生命、ヴェーダは知識の意であるが、一般には「生命の医学」と称している。この医学はインドのヴェーダ時代 (BC. 6,000~BC 4,000) から伝えられたものといわれるため古代インド医学と云ってよいと思う。

インド、ネパール、パキスタンなどでは、その他にユナニ医学つまりアラビヤ医学が、また、ネパールの北部高地ではチベット医術(学)が夫々取り入れられている。

このユナニの語源はギリシャの意味であり、ギリシャ医学体系を意味しているがラテン語のuna (一緒). unaninus (和合している) という言葉がぴったりするようにアユルヴェーダの医学に取り入れられている。

〔註〕 マホメット教徒達はギリシャのことをイオニア (unani) と呼んでいる。しかし、元来、イオニアというのはギリシャ、ローマ時代に小アジア (現在のアラビア地方) 西岸の一部に与えられた地名である。そのためヨーロッパの歴史家達はこの地方に行なわれている医学をアラビヤ医学と呼んでいる。つまり、アラビヤの医学は何時までもギリシャ医学 (イオニア医学) を歩んでいたのにヨーロッパの医学はその後、相当変化しアラビヤ医学と異なっているので、これをアラビヤ医学と称し自分達の医学と区別しているのである。

チベット医学が中国の医学でなく、インドのアユルヴェーダ医学の流れを汲んでいることはチベット医学書の基本であるギューシー (八科の真髓書) がインドのアスタンガ・サングラー八科の精義書) やアスタンガ・ヒルディア (医学の真髓の本集) の翻訳であることからも明日である。

〔註〕 アスタンガ・サングラー… (675~685年にシン1世が8冊の医学書を要約して1巻としインドの5つの地方の医師に、この医学書に従って医療させた。今日でいう医療指針と言うべきものである。

アスタンガ・ヒルディア…8世紀ヴァグバータ2世が著した医学書でスシュルタ本集に似た配列をしている。

インド、ネパールなどには、その他に小数種族の人々が用いている民間薬、例えばネワール族、リンブー族のサタワー (原植物名 Paris polyphira), ネワール族、タクル族のパンツオーレ (原植物名 Orchis incarnata) タコール地方に住むタカリ族やボテ族の用いている冬虫夏草 (Cordyceps sinensis) などがある。

古代インド医学の伝説によると医学の神はブラーマやインディラであるが BC. 1000 頃アトレア仙人が現れ6人の弟子に医学を伝えたといわれる。その系統は次の通りである。アユルヴェーダ医学は薬草による治療医学であるといわれているように、ネパールの保健省製薬所に保管しているチャンドラ・ニガンツの一(薬物書)には薬草 800 種、動物鉱物 200 種合計 1000種の図が彩色で画がかれている。しかし現在市場で繁用されている生薬は、その3分の1程である。私がネパールに滞在中に収集した生薬は300種であったが、土名 457 をもって市販されていた。

その土名と判明した原植物は表 I のとおりであるが薬用部分で分けると次のとおりである。

根及び根茎	67 種
種 子	62 種
草 部	45 種
果 実	34 種
葉 及 び 茎	32 種
皮 部	26 種
木 部	15 種

* 田辺製薬生物研究所

インド医学の系統図

ブラーマ (Brahma)
↓
ダクシャブラジャパティ (Daksha prajapati)
↓
アスウィン・クマル兄弟 (Ashvini kumar)
↓
インディラ (Indra)
↓

バーラッド・バジャ
↓
アトレア仙人
↓

ア グ ニ ・ ベ ー シ ャ	ベ ー ラ	ハ リ タ	バ ラ シ ャ サ ラ	ジャ ツ カ ル ナ	ク シ ャ ラ バ ニ
--------------------------------------	-------------	-------------	----------------------------	------------------------	----------------------------

ヤー [ヴェーダ時代の直後(BC. 800)の人]
アグニ・ベーシャ本集の著者
↓
6～7代後

チャラカ (Charaka)

カシミールの医師で { B C 58年のVikram 時代
D C 78年のSaka 時代
D C 123年のKanishka王の時代 }

の内科医と云われチャラカ本集を著したが、この書はアグニ・ベーシャの遺書を改訂したものと伝えられる。

トルダーバラ (Dridhabala)

カシミールの医師でチャラカ本集を現在のように完成させた人 (薬草 約 500種)

ナガルジュン (龍樹菩薩)

B C. 1～D C. 2世紀頃の人
スシュルタの本集に後の本義書を追補し現在のスシュルタ本集を完成す。
薬草 760種を記載す。

バクバッタ (Bagvadda)

Astanga-Sangraha }
Astanga-Hridaya } などを著す

チャクラパニダッタ

11世紀頃の人。彼以後鉅物による治療はアユルヴェダーの特長となった。

ダンバンタリ学派
ダンバンタリ薬物
薬草 400種を説明

スシュルタ
B C. 200頃の人
サルヤ本義書
(スシュルタ本集
の前文)

石（鉱物） 8 種
 動物（麝香，熊胆，牛黄イカの甲羅） 4 種
 その他の粉末生薬 7 種

合 計 300 種

これら生薬のうち有名なものゝ基原植物の分布はネパールにおいては概ね次のとおりである。

Terai 地域（高度 200～400m）

Asparagus racemosa
Acacia catechu
Aegle marmelos
Butea monosperma
Curcuma zedoaria
Embrica officinalis
Mangifera indica
Mesua fera
Micheria chanbaca
Moringa oleifera
Oroxylum indicum
Rauwolfia serpentina
Semecarpus anacardium
Shorea robusta
Vinca rosea
Withania somnifera
Woodfordia floribunda

Chulia 地区（高度 400～800m）

Bergenia ligulata
Hedychium spicatum

Mahavar 地区（高度 1,000～3,000m）

Acorus calamus
Adhatoda vasica
Berberis asiatica
Centella asiatica
Cuscuta reflexa
Lobelia pyramidalis
Mahonia nepalensis
Oscimum basilicum
Oscimum sanctum
Paris polyphylla
Potentilla fulgens
Stephanandra rotunda

Himal 地区（3000m以上）

Betula utilis

Cordyceps sinensis
Cedrus deodara
Ephedra vulgaris
Fritillaria roylei
 Musk
Nardostachys jatamansi
orchis incarnata
Parnesia nubicola
Podophyllum emodi
Rheum emodi
Swertia chiraita

○アユルヴェーダ医学に特有な薬用植物名と効能は次のとおりである。

Aegle marmelos 果実（未熟）収斂，消化，利尿果実（熟したもの）のバルブ）清涼，緩下根皮………解熱，魚毒の解毒
Adhatoda vasica 葉，茎………喉の鎮痙
Bergenia ligulata 根茎………（鎮痛）
Bombax malabaricum 樹脂………蛇咬花，果実 “
Butea monosperma 樹皮 催吐剤
花 収斂，利尿，強壯
種子 駆虫，蛇咬，鎮痛
葉 強壯
Cordyceps sinensis 全体（虫体菌体共）強精，強壯
Cuscuta reflexa 種子 驅風，體質改善
茎 下痢，解熱（長期間の熱）
Euphorbia royleana 乳汁 驅虫
茎 魚毒
Ficus bengalensis 樹皮の浸剤糖尿，強壯，利尿
Ficus religiosa 根皮 収斂
Mesua ferea 蕾 赤痢
葉と花 蛇咬，サソリの刺傷
Moringa oleifera 種子の油 リウマチ
花 強精
根皮 頭痛止め
Nardostachys jatamansi 根茎 鎮静（ヒステリー）
Orchis incarnata 根塊 強壯（滋養）
Orchis muscivora 根塊 祛痰
Paris polyphylla 根塊 解毒

Parnesia nubicola	根塊 鎮痛	大 黄 Rheum emodi	〃
Picrorhiza kurroa	根茎 消炎, 健胃,	貝 母 Fritillaris roylei	強壯
Piper betel	葉 強壯,	附 子 Aconitum berrox	靜痛
Podophyllum emodii	根 抗癌	polmatum	
Stephania rotunde	塊茎根 鎮痛	楊 梅 Myrica nagi	炎症の収斂 下熱
Terminaria belerica	種子(果実) 強壯	吉根根 Valeriana wallichii	鎮靜
Terminaria chebra	種子(果実茎) 強壯 (神經)	棗(ナツメ) Zizyphus jujuba	強壯
Vinca rosa	全草 白血病の治療 悪性リンパ腫	○わが国に自生又は栽培しているがわが国で 使用していない薬用植物	
Woodfoldia fruticosa	花, 葉枝 赤痢, 高熱の解熱	ツボクサ (Hydrocotyld asiatica)	の全草記憶をよくする
○わが国の生薬と類似(効能, 原植物ともに) している薬用植物は次のとおりである。		仏 桑 華 (Hibiscus rosa-sinensis)	の葉 赤痢の治療
天門冬 Asparagas racemosa	強壯	オジギソウ (Mimosa pudica)	の種子強精
メ ギ Berberis asiatica	健胃,		
aristata	体質改善		

Establ. 1870

HEIANDOO PHARMACY

5-78 Aioityoo, Nakaku, Yokohama, Japan.

Tel. Yokohama : 045-681-3232 ; 3233.

Dr. TOOTAROO SIMIZU, Pharmacist.

Professor of Pharmacy TOHO UNIVERCITY, Tokyo

Member of THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY, Tokyo.

Member of L'ACADEMIE INTERNATIONALE D'HISTOIRE DE LA PHARMACIE. Pays Bas.

Member of Internationale Gesellschaft für Geschichte der Phamazie e. V., Stuttgart.

Member of the American Institute of the History of Pharmaey, Madison.

HUZIO SIMIZU, Chief Pharmacist.

創 業 明 治 3 年

平 安 堂 薬 局

横 浜 市 中 区 相 生 町 5-78 (馬車道)

電 話 (045)-6 8 1 - 3 2 3 2, 3 2 3 3

東邦大学教授 薬学博士 清 水 藤太郎
薬 局 長 薬 剤 師 清 水 不二夫

Vernacular Name and Botanical Name of Crude Drugs in Nepal

Vernacular Name	Botanical Name	Useful Portion
Aak	<i>Calotropis gigantea</i> (Linn.) R. Br. ex Ait	Fruit
Aduwa, (Sutho)	<i>Zingiber officinale</i> Roxb.	Dry Rhizome
Agamota, Agnimantha, Ajamoda	<i>Trachyspermum ammi</i> (Linn.) sprague	Seed
Agasti	<i>Sesbania grandiflora</i> (Linn.) Pers.	-
Agur	See Krishna Agur	-
Ainselu ko-zara	<i>Rubus</i> sp. (R. Mollucanus L.)	Root
Akash velli ko-lahara	<i>Cuscuta reflexa</i> Roxb.	Stem
Alaichi, (Alenchi)	<i>Amomum subulatum</i> Roxb.	Fruit
Alas	<i>Linum usitatissimum</i> Linn.	Seed
Alenchi	See Alaichi	-
Amala Ko-sukuti	<i>Emblica Officinal</i> Gaertn.	Fruit
Amal bed, chulti omils	<i>Rheum emodi</i> Wall.	Stem
Amal tash	See Raj-Briksha.	-
Amba ko-bot-ko bokra	<i>Psidium guajava</i> Linn.	Bark
Amp ko-khoya	<i>Mangifera indica</i> Linn.	Seed
Anar ko-biz	<i>Punica granatum</i> Linn.	Seed

Andela arend	Richinus communis Linn.	Seed
Ankhali ghans	Equisitum sp.	Stem
Apamarga	Achyranthus aspera Linn.	Herb
Aparagita	Clitoria ternatea Linn.	—
Aphim	Papaver somniferum Linn.	—
Arel ko-zara	—	Wood
Arroroot	Maranta arundinacea Linn.	Tuber
Ashibala	See Atibala	Seed
Asok ko-bokra	Saraca Indica Linn.	Bark
Asuro	Adhatoda vasica Nees	Flower & Top leaf
Aswagandha, (Asvahandika)	Withonia somnifera Dunal	Root
Atibala, (Ashibala)	Sida rhombifolia	Seed
Atish	Delphinium denudatum Wall.	Tuber
Auralo	Parnassia nubicola Wall.	Fruit
Babari	? Ocimum basilicum Linn.	All portion
Babur, Babhur ko-bokara, Bubu.	Acacia arabica Willd.	Bark
Badaher	Artocarpus heterophyllus Lam.	Seed
Badam	Prunus amygdalus Batsch	Seed
Bair	Zizyphus jujuba Lam.	Wood
Bakainu ko-geda	Melia Azedarach Linn.	Fruit
Bakainu ko-zara	Melia Azedarach Linn.	Wood

Bakchi	Psoralea Corylifolia Linn.	Seed
Balacharia	? Nardostacys	Root
Balchand ko-biz	Aerva tomentosa Forsk	Seed
Balu	Sida spinosa Linn.	
Bamsha lachan	CaCo ₃ (From Bamboo stik)	Mineral
Bandhale	Curcuma aromatica Salisb	
Banlasum	Allium wallichii kunth.	Bulb
Banso	—	
Ban mula	—	Root
Bar, bor	Ficus bengalensis Linn.	
Barchi Meda	See Tatela ko kosa ko phal	
Bare mal	Ficus Bengalensis Linn.	Root
Barro	Terminalia belerica Roxb.	Fruit
Basfaiz	See Bisfez.	
Batulepati	Stephania rotunda Lous.	Root
Bayer, Bayar	See Bair (zizyphus jujulia Lam.)	Wood
Bayubirang		Fruit
Bazradanti	Potentilla sp.	Root
Barzuli		Root
Behein, Bihee	Solanum Khasianum Linn.	Fruit
Bel Bokra	Aegle marmelos Coor.	Wood
Bel ko-chana	Aegle marmelos. Corr.	Fruit

Bel Patra	Aegle marmelos. Corr.	Leaf
Bezor	See Patthar.	Animal
Bhaki amiloo, (See Vakiamilo)		Fruit
Bhalayo	Rhus sp.	Nut
Bhang	Semicarpus anacardium Linn.	Leaf
Bhairumg pate (Bhairum pate)	Cannabis sativa Linn. var. indica	Leaf
Bhalu ko-pitta	Junipers communis Linn.	Animal
Bharat keshar	Bear Bile.	Root & Stem
Bhargi, (Bharangi)	Clerodendrum indicum (Linn.) Ktze.	Bark of Root
Bhazuri	Clerodendrum serratum spreng.	Root
Bhenda Singi	Selinum tenuifolium Wall.	Fruit
	Geranium nepalense	
	Zizyphus rugosa	
Bhirkoulo (Boiufu Swan)	Coix Lachry-ma-Jobi Linn.	
Bhogati	—	
Bhojpatra, Utis ko-Zora	Betula utilis D. Don.	Bark
Bhojapatra		
Bhorlo		Climber Stem
Bhringa Raj	Eclipta alba Hook.	Herb
Bhumiamalaki (Lasi)	Nephrolepis cordifolia Presl.	Whole Harb
Bhutkesh	Corydalis govaniana Wall.	Root
Bhuyudhayana	—	Harb

Badarikanda	See Biralikand Biralipuna.	
Bikhama, Bikh	Aconitum Palmatum.	Tuber
	Aconitum Ferax.	Tuber
Biralikand (Biralipuma)	Pueraria tuberosa DC.	Root
Bisfez (Basfaiz)	Polypodium vurgare Linn.	Root, Rhizome
Bojho (Bojha)	Acorus calamus Linn.	Root
Bomba bari ko-biz	Phaseolus adananthus G. F. Meyer.	Seed
Bor	See Bar.	
Bramki	? Bacopa monniera (Linn.) Wettst.	Herb
Casiuri	Musk Deer	
Chaba (Chava)	Piper chaba Hunter.	Fruit
Chabo	See chaba.	
Chakramandi	See Taper ko-biz	seed
Chambo, Chabo	See chaba	Root
Chameli ful ko-pat	Jasminum officinale Roxb.	Leaf
Chameli ko-ful (jee swa)	Jasminum officinale Roxb.	Flower
Chamsur ko-biz	Lepidium sativum Linn.	Seed
Chanda maruva	See Sarpagandha.	Root
Chari amilo	Oxalis acetosella Linn.	Herb
Chatiwana	See Chhatiwana.	
Chhdila Bodhna, Chhadila	Lichen	Lichen
Chatiwan Chhatiwana	Alstonia Scholaris R. Br.	Bark

Chhuimui	Mimosa pudica Linn.	Tuber
Chhyapi	Allium ascalonicum Linn.	
Chichinda	Trichosanthes anguina Linn.	—
Chhiki Chhiki Bun	Crotalaria verrucosa Linn.	Seed
Chikon Lapa	Meat of Bat	Animal Bat
Chiraita	Swertia chairaita Buch. - Ham	Herb
Chitu	See kalo chitu.	Stem
Chok	See Thahal ko-zaro.	
Chopcini (chobchinee)	Smilax sp.	Root
Chulti omilo, Amal bed	Rheum emodi Wall.	Stem
Chutro	Berberis aristata Roxb.	Bark
Dalchini	Cinnamon zeylanicum Blum.	Bark
Dampate		
Danti	? Baliospermum montaneum Muell-Arg.	Wood
Deodaru ko-bokra	Cedrus deodara (Roxb) Loud.	Bark
Dhaiyero ko-ful	See Dhoara ko-ful.	
Dhainaro ko-ful	Woodfoldia fruticosa Kurt.	Flower
Dhania (Dhaniya)	Coriandrum sativum Linn.	Seed
Dhaturo	Datura sp.	Leaf
Dhoara ko-ful	See Dhanaro ko-ful.	
Dhulo oakhati	See Thulo oakhati.	
Dhupi	Junipers sp. (J. marcopoda Boiss.)	Wood

Dhurugan, Dhruhyan	—	Herb
Dopahariya	? Pentapetes Phoenicea Linn.	
Drona puspa ko-biz (Druna puspa)	Leucas cephalotes spreng.	Seed
Drona Puspa (Druna Puspa)	Lucas Cephalotes Spreng	Herb
Dudhe ghans	—	Herb
Dungero ko-ful	—	Nut
Duralambha (Dur-labha)	Alhagi Pseud-alhagi A. Ca.	Stem with Leaf
Durey	Pergularia sp.	Herb
Ela.	Elettaria cardamomum Matom.	Fruit
Gagima	See Bhang.	Leaf
Gajpipla	See chaba	Fruit
Camdol, Salep misri	Orchis mascula Linn.	Tuber
Gandhak	Sulfa.	Mineral
Gannaino	—	Root
Gat	Zingiber officinale	Rhizome
Gandhe, Orontsa	Houttuynia cordata Thumb.	
Ghiu kumari	Aloe vera Touru et Linn.	Leaf
Ghora tapre	Centella asiatica (Linn.) Urban.	Herb
Ghue kumari	See Ghiu Kumari	Leaf
Gire sag	Lactuca sativa Linn.	All parts
Gineri, Ginari	Premna integrifolia Linn.	Bark
Gokhur	Tribulus terrestris Linn.	

Gue	See Supari.	
Gulaban Pusa	Rosa alba Linn.	Herb
Gulab ko-ful (Phuol ful)	Rosa alba Linn.	Flower
Gun chulo (Guthulo)	—	Herb Graminea
Gunja, Rati	Abrus Precatoris Linn.	Seed
Gunlava		Tuber (Liliaceae)
Gurju ko-sattic	White solid from bamboo	Mineral
Garujo	Tinospora cordifolia (Wild) Miers	Wood or Root
Gurzu ko-lahara	—	Root
Gwayaljiawa Fuspa	—	Root
Hachhitu jhar	Dicrocephala latifolia DC.	Herb
Hahikan ko-ful	Opuntia sp.	Fruit
Haledo Kalo Haledo	Curcuma domestica valetton.	Rhizome
Hal hale ko-sag	—	Leaf Leguminosae
Harichur	—	Root
Hariyo dubu, Seto duboo	? Cynodon dactylom.	Herb
Harro (Thulo harro)	Terminalia chebula Retz	Fruit
Hhahoober	—	Fruit
Himal ko-ful	—	Herb & Stem & Leaf
Hirakasi	Fe Se 4	Mineral
Imali (Titispon)	Tamarindus indica Linn.	Seed
Indrajar, Indrajana, Kurchi	Holarhena antidysenterica Wall.	Seed

Indrajar ko-bokra	Holarrhena antidysenterica Wall.	Bark
Indrayani	Citrullus colocynthis Schraeder	Root
Ismogal, Isabghol	Plantago amplexicaulis cav.	Seed
Jaipatri	Myristica flangra Houtt.	Flower
Jamanemandro	Mahonia Napaulensis DC.	Bark
Jamuna	Syzgium Cumini Skeels.	Fruit
Jamuna ko-pat	Syzgium Cumini Skeels.	Leaf
Janma dosha haru		Herb Compositae
Japapuspi ko-pat	Hibiscus rosa-sinensis Linn	Leaf
Jaringo	—	Stem
Jatamansi	Nardostacy's jatamansi DC.	Root
Jayanti ful ko-lahara	Sesbania sesban Merr.	Stem
Jeera, Jira, Zira	Quamoclit pennota Bojer	Seed
Jethi madhu	Cuminum Cyminum Linn.	Root
Jhuse Til, Niger	Glycerrhiza glabra Linn.	Seed
Jibaka	Guizotia abyssinica Cass.	
Jibanti, (Sun gava)	See gunlava.	Stem
Jotismoti ko-biya	Coelogyne cristata Lindl	Fruit
Jugali harro (Horro)	Cardiospermum halicacabum Linn.	Nut
Jugmasi	Terminaria chebula Retz.	Seed
Jumuna ko-pat	See Kagchhuchi	
	See Jamuna	

Jwanu, Zuan, juwann	<i>Trachyspermum ammi</i> (Linn.) Sprangue	Seed
Jyamir ko-biyan	<i>Citrus limon</i> (Linn.) Burm. f.	Seed
Jyapu ghain	<i>Gnaphalium lutea-albo</i> Linn.	Herb
Kabhro, Kadhro	<i>Ficus lacor</i> Buch Ham. Syn. F. inbestorga	
Kachur	<i>Curcum Zedoaria</i> Rose	Root
Kafal bokra, Kafal ko-Bokra	<i>Myrica Nagi</i> Thumb.	Bark
Kagchhuchi	? <i>Syzygium operculatum</i> Gamble.	Fruit
Kakanasika, Kanwazhali	<i>Leea aequota</i> Linn.	—
Kairo Zar	<i>Gnaphalium luteo-album</i> Linn.	Herb
Kaita	—	Nut
Kakar singhi	See Karkat Singhji.	
Kakoli	<i>Pleone praecox</i> Don.	Bulb
Kakuro ko-biz	<i>Cucumis sativus</i> Linn.	Seed
Kalo chitu	? <i>Plumbago zeylanica</i> Linn.	Cut of Stem
Kalo Dhuturo ko-biz	<i>Datura</i> sp.	Seed
Kalo haledo, Haledo	See Haledo	Rhizon
Kalo Kauso ko-biz	<i>Mucuna deeringiana</i> Hook. (Black seed)	Seed
Kalo vashak	<i>Adhatoda vasica</i> Nees	Leaf
Kamal	<i>Nelumbium nucifera</i> Gaertn.	Seed
Kanamasi	See jatamacy	Root
Kaner ko-pat ko-biz	? <i>Nerium indicum</i> Mill.	Fruit
Kantakari	<i>Solanum xanthocarpum</i> Schrad & Wardl.	Fruit

Kao cho	See Kauso, Kaocho	Seed
Kapur	Cinnamomum Camphora T. Nees.	Crystal
Karam	—	Rosin
Karanda ko-pat	? Feronia limonia swingle	Herb
Karelo Karela	Momordica charantia Linn.	—
Karouda, Krounda	Carissa Carandas Linn.	—
Karengi, Damar	Pongamia pinnata (Linn). Merr.	Seed
Karkat singhji	Pistacia integerrima Stew. et Brandis	Gall
Kas ko-zar	Vetiveria zizanioides Nash.	Root
Kasturi	Musk	Animal
Kasur	Scirpus kysoor Roxb.	Tuber
Kaula ko-bokra	? Cucubita pepo Linn.	Bark
Kauso, Kaocho	Mucuna prurita Hook (white seed)	Seed
Kayo ko-bokra	? Cinnamomum Parthenoxylon Meissn	Bark
Khamari	Gmelina arborea Linn.	Bark
Khanayo	Ficus cunia Ham. ex. Roxb.	
Khari ko-bokra	Celtis Australis Rich.	Bark
Khayer	Acasia Cathetu Willd.	Extract
Khayer ko-bokra	Acasia Cathetu Willd.	Bark
Khareto	—	
Khicha Bokra	? Lycium ruthenicum Murr.	Leaf
Khursani ajowan	Hyoscyamus niger Linn.	Seed

Khursani	Capsicum annum Linn.	Fruit
Koeral (Koirala ko-bokra)	Bauhinia variegata Linn.	Bark
Koiral	Bauhinia purpurea Linn.	
Kousoli	See Supari.	Nut
Krishna agur	Vepris bilocularis Engler.	Wood
Krishna Jeerah	Nigella sativa Linn.	Seed
Kuberakcha	Stereospermum suaveolens DC.	Seed
Kubhindo	Benincasa hispida (Thumb.) Cogn.	Fruit
Kuchila	Strychnos Nux-Vomica Linn.	Seed
Kukhi Taj, Nakali Dalchini	See Dalchini.	Bark
Kukurdania (Desi chopchine)	Smilax sp.	
Kumkum	Didymocarpus aromatica Wall.	Leaf
Kush ko-zara	—	Herb
Kut biz	—	Bark
Kut	Saussurea lappa C.B. Clarke.	Root
Kukurdaina	Smilax sp.	Rhizome
Kutki	Picrorhiza kurroa Royle. ex. Benth.	Root
Kyamuna ko-ful	Helicteres sp.	Flower
Kyamuna ko-pat	? Helicteres sp.	Leaf
Kyamuna ko-bokra	Helicteres sp.	Bark
Lalani ko-zara, Lalagia	? Striga gesneroides (Willd) Watke.	Herb
Lall Mohana (Lalmokhana)	—	Seed

Lapsi	<i>Spondias axillaris.</i>	Fruit
Lasi	<i>Nephrolepis cordifolia.</i> Presl.	All parts
Lata Karange	<i>Caesalpinia crista</i> Linn.	—
Latiya betu	1. <i>Amaranthus</i> sp.	Seed
Lazzabati, Lazzawati	1. <i>Colebrookea oppositifolia</i> Sm.	Stem
Lekh Pangara	<i>Aesculus hippocastanum</i>	Seed
Lodh	<i>Symplocos paniculate</i> Wall.	Bark
Lohan Loban	<i>Pinus Roxburghii</i> Sargent	Resin
	<i>Pinus Wallichiana</i>	
Madesi Sonf, Madesi sonp	<i>Foeniculum vulgare</i> Mill.	Seed
Main, Mein	Bees Wax.	Wax
Mainnphal	<i>Randia dumetrum</i> Lam.	Nut
Maha bala, Kapas	<i>Gossypium arboreum</i> Linn.	—
Maharangifol	<i>Onosma emodi</i> Wall.	Bark of Root
Majitag gath, Majitha ko Lahara	<i>Rubia Cordifolia</i> Linn.	Root
Mamira	1. <i>Coptis Teeta</i> Wall.	Rhizome
	2. <i>Pilli zara</i> (original plant not sure)	
Marich	<i>Piper nigrum</i> Linn.	Fruit
Masparni, Mashparne	<i>Mucuna Prurita</i> Hook.	Herb
Mazanfall, Mazu Fal		Gall
Meda, Maha Meda	? <i>Litsea Polyantha</i> Juss	Herb

Meda, Maha Meda	? Luvunga scandens Buch-Ham.	
Mein	Bees Wax.	Wax
Methi	Trigonela foenum graecum Linn.	Seed
Moola	See Muliki biz.	
Moo-swan	—	Leaf & Stem
Moorga Purne	See Mudgaparni	Herb
Moorgauth	—	Root
Mothe	Gyperus rotundus Linn.	—
Mudilo	Gentiana kurrooa Royle.	Root
Maagaparni	—	Herb
Mugrelo	Nigella sativa Linn.	Seed
Mugi	Phaseolus mungo Linn.	—
Mula	See Mulki Biz.	
Mulki biz, Moola	Raphanus sativa Linn.	Seed
Munnesori ko-ful	? Mimusops elengi Linn.	Herb
Musali	—	
Mushaber	—	Extract
Nagar muta	Cyperus scariosus R. Br.	Root
Nagbhala, Nagbala	? Sida spinosa Linn.	Seed
Nag Keshar	—	Bud
Nag Keshar	—	Stem in Flower
Nang sagar	N H ₄ C L	Mineral

Nariora	See Gur.	Nut
Naru, Naroo	Aesculus indica Colebr.	Seed
Neem ko-pat (Nim ko-pat)	Picrasma sp. (not Melia)	Leaf
Nilkamal (Nirkamal)	Nymphaea stellata Willd.	Flower
Nil moli	? Strychnos Potatorum Linn.	Seed
Nim Kat	Azadirachta indica A. juss.	Wood
Nirbishi	Delphinium denudatum Wall.	Tuber
Niswanto	—	Root
Okhar ko-bokra	Juglans regia Linn.	Bark
Ola	Amorphophallus canpanulatus Bl.	—
Paan	Piper betle Linn.	Root
Padari	Stereospermum tetragonum DC.	Bark
Padma Pashar	Nelumbium nucifera.	Flower
Padmakaser	Nelumbium nucifera	Stigma
Padmachar	Rheum emodi Wall.	Root
Painya ko biz	Prunus cerasoides D. don.	Seed
Painya ko bokra, (Bayn ko-bokra)	Prunus cerasoides D. Don.	Bark
Pakhan bet (Pashanabhedā)	Bergenia ligulata (Wall.) Engl.	Root
Palans ko-biz	Butea monosperma (Lam.) Kuntze.	Seed
Palas ko phul	Butea monosperma (Lam.) Kuntze.	Flower
Panchu aunle	Orchis incarnata (Linn.) Willd.	Tuber or Root
Prabal, Paroval, Parwal	Trichosanthes dioica Roxb.	Fruit Bark

Pridram (Pyrethrum)	See Pyrethrum.	Flower
Patha	See Batule Pati	
Patthar	Gall stone	Animal
Pipal ko-zara	Ficus religiosa Linn.	Root
Pipla (Pipala)	Pipel longum Linn.	Fruit
Pipla mul	Pipel longum Linn.	Herb
Pipal ko-pat	Pipal longum Linn.	Leaf & Stem
Pire ghas	1. Cymbopogon citratus. stapf 2. Polygonom sp.	Herb
Pitta papada, Pit papra	Naregamia alata W. & A.	Herb
Piyale	Fritillaria roylei.	Bulb
Podophyllum	Podophyllum emodi Wall.	—
Postakari, (yatsua-gumboo)	Cordyceps sinensis	All stem
Postak dana (Postokadana)	Papaver somniferum Linn.	Seed
Pouder	Lycopodium clavatum Linn.	Sporen
Prangali	—	Root
Priyangu, Priyangu	? Aglaia Roxburghiana Miq.	Seed
Pudina	Mentha aevensis Linn.	Leaf
Punarnaba	Boerhaavia diffusa Linn.	Stem
Pushkara mool	—	Stem
Pyrethrum, Paridram	Chrythemum cinerarifolium Visiani	Flower
Rai, Rayo	Brassica nigra (Linn.) Koch.	Seed

Raj Briksha	Cassia fistula linn.	Seed
Rakta chandan	Pterocarpus santalinus Linn.	Wood
Rahar	Cajanus cajan (Linn.) Millsp.	Seed
Ram patri	See Jaipatri.	Flower
Ranighans	Cheilanthes argentea (Gmel.) Kunze.	Herb
Rasna ko-Zara	—	Root
Rasna (Rasula)	—	Seed
Rati	See Gunja.	Seed
Rato musli	Curculigo orchioides Gaertn.	Tuber
Renuka ko-ful	? Piper aurantiacum Wall.	Stem & Leaf
Riddi (Raddhi) ko-ful	? Luvunga scandens Ham.	Tuber
Ritha, Rittha	Sapindus mukoross Gaertn.	Fruit
Rohini	See Sindhure.	
Rowan (Lwang)	Syzigium caryophyllatum Gaertn.	Bud
Rudilo	Nyctanthus arbortristis Linn.	Herb
Rudilo	Nyctanthus arbortristis Linn.	Wood
Rugahk	—	Root
Runimastki, Runimasthi	—	Rosin
Ruk Kesar (Rukh)	Mesua ferrea Linn.	Stigma
Sahachar, Sacchar	Saccharum officinarum Linn.	Stem
Safed musli	? Chlorophytum aurundinaceum Baker.	Tuber
Sagiba ko-biya	See Sajiwa.	Nut

Sajikhar	Fe S	Mineral
sajiwa	Jatropha Curcus Linn.	Nut
Salawamisri, Salmimi	Orchis sp.	Tuber
Salep misri	Orchis muscula	Tuber
Salparni, (Prishni-parni)	Desmodium gangeticum DC.	Herb
Samudar feeng	Shield of cuttlefish	Fish
Samudra phal, Samudra ful Sumundra	1. Barringtonia acutangula Gaertn	Nut
	2. Avicennia officinalis	
Sano pipala	Piper sp.	Fruit
Sano harro	Terminalia sp.	Nut
Sariba, Sariwa	Ichnocarpus frutescens R. Br.	Fruit
Sarpagandha	Rauwolfia serpentina Benth ex. Kurz	Root
Sarsoo, Toori ko-Biya	Brassica campestris Linn. var. rapa (Linn.) Hartm.	Seed
Sashi	? Crotalaria burhia Buch. - Ham.	Fruit
Satavari	Asparagus racemosus Willd.	Root
Satisal	Dalbergia latifolia Roxb.	Wood
Satuwal	Paris Polyphylla Smith.	Root
Sawr ko-bokra	? Vallisneria spiralis Linn.	Bark
Sermindu (Serbindu)	See Shyok.	Root
Seto dhaturo ko biz	1. Datura metel Linn.	Seed
	2. Datura stramonium Linn.	
Seto duboo,	See Hariyo duboo	

Shalparni, Salparni	See Sal parni (<i>D. ganzeticum</i> DC.)	
Shanapushpi	See chiki chiki Bum.	Seed
Shobhanjan	See Sobanjan ko phal	Powder
Shrikhand ko-dhuboo	<i>Santalum album</i> Linn.	Root
Shyak, Sermindu	? <i>Altrais</i> sp.	Fruit
Sigara	<i>Trapa bispinosa</i> Roxb.	Fruit
Sakai	<i>Acacia consinna</i> DC.	Mineral
Silajit	—	Fruit
Siltimur	<i>Zanthoxylum acanthopodium</i> DC.	Latex
Simal	<i>Salmalia malabarica</i> shoot & Endl.	Bark
Simal ko-chop	<i>Salmalia malabarica</i> shoot & Endl.	Flower
Simal ko-ful	<i>Salmalia malabarica</i> shoot & Endl.	Root
Simal ko-zara	<i>Salmalia malabarica</i> shoot & Endl.	Harb
Simki	<i>Chrysantheneum</i> sp.	Fruit
Sindhure, Rohini	<i>Mallotus philippinensis</i> Muell-Arg.	Herb
Siplekan k-munta	<i>Lagerstroemia speciosa</i> (Linn.) Pers.	Fruit
Siplikan	<i>Lagerstroemia speciosa</i> (Linn.) Pers.	
Sisno ko-zara	1. <i>Urtica dioica</i> Linn. 2. <i>Fragaria</i> sp. 3. <i>Dalbelgia sisso</i> Roxb. ex sisu.	Root
Siuri ko-kanda	<i>Euphorbia royleana</i> Boies	Stem
Siva Linga, (Shiba)	<i>Bryonopsis laciniosa</i> (Linn.) Navd.	Fruit

Siwali nirgundi	? Vetex negundo Lium.	Leaf & Herb
Siyah musli	Anellema scapiflorum Wight	Root
Sobanjan ko-phal	Moringa oleifera Lam.	Seed
Somal gatta Somalata	Ephedra gerardiana Wall.	Herb & Root
Soyo ko-biya (Suf)	Anethum graveolens L.	Fruit
Suf, Soupha	See Soyo-ko-Biya	
Sugandha bal	Valeriana Wallichii DC.	Root
Sugandha kokila	? Cinnamomum glanduliferum Meissn	Fruit
Suhaga	Borax	Mineral
Suibhabacha, Suye-Bhagacha	Gynandropsis gynandra (Linn.) Briquet	Seed
Sukmel	Gynandropsis gynandra (Linn.) Briquet	Fruit
Sumundra phal (Samudra)	See Samudra	Nut
Sungava, (Jibanti)	Coelogyne cristata Lindl.	Bulb & Stem
Supari, Kousoli	Areca Catechu Linn.	Nut
Sutho, (aduwa)	Zingiber officinale Roscoe	Rhizome
Suye Bhagacha	See (Suibhabocha)	
Takosi	—	Nut
Talis	—	Stem
Talispatra	—	Stem
Talmakhana	Asteracantha longifolia Nees.	Seed
Tang	—	Fruit
Tangahaj, Tanga Raj	? Eclipta alba Hassk.	Herb

Tapre ko-Biz chakramandi	Cassia tora Linn.	Seed
Tapre	Cassia sophora	—
Tatela, Tatelo	Oroxylum indica vent.	Bark
Tatela ko Kosa ko-ful, Barchi Medha	Oroxylum indica Vent.	Seed
Taulo Oushadhi	See Thulo ouk ati	
Tejipat	Cinnamomum tamala Nees & Ebern	Leaf
Tejipat ko-bokra	Cinamomum tamala Nees & Ebern	Bark
Thakal, Thakal ko-jara (chok)	Argemone mexicana Linn.	Herb
Thulo harro	Terminaria chebura Retz.	Nut
Thulo oukhathi	Astilbe rivalaris Benthian ex Don	Root
Thulo pipala, (chaba)	Piper cubeba Linn. f.	Fruit
Timur, Timura, Tambur	Zanthoxylum oxyphyllum Edgew.	Fruit
Tinger	Zanthoxylum serra Turcz	Fruit
Titepati	1. Artemisia vulgaris Linn. 2. Chrisanthe sp.	Herb
Titkankri	See Thotne	Fruit
Toori ko-biya	See Sarsoo	
Tuki ful	Taraxacum officinale Weber	Root
Tulsi patra	Ocimum sanctum Linn.	Stem, Leaf & Herb
Ukhu ko-Zara	Saccharum officinarum Linn.	Root
Uneu ko-ghans (Unnu)	—	Herb
Usir, Ushir	—	Herb

Utis ko-Zara	Betula utilis D. Don.	Root
Vargi ko-Zara Maharangi	See Maharangi	Root
Vethu ko-sag	? 1. Chenopodium murale	Herb
	2. Chenopodium album Lium.	
Vhate vetu	Chenopodium album L, var. centrorubrum	Seed
Vimiro	Citrus medica var. medica	—
Yatsa gumbu	See Postakari	
Yekh bir	Lobelia Pyramidalis Wall.	Herb (stem & leaf)
Yuro lambha	? Alhagi camelorum	Herb
Zamanehandro	See jamanemondro	Root
Zamamhandro, jamanemandrs	See jama mandro	Bark
Zatamoshi	See jatamosi	
Zira (Jeera)	See jeera.	
Zuan	—	Seed
Zuze til	—	Seed
Zyamuro ko-byan	—	Seed

札幌で開催された。『日本薬学会第90年会における薬史学会』は、去7月28日、下記研究発表とシンポジウム「比較民族薬物論」(本号記事掲載)を行なった。

1) 伊藤圭介の本草学とその展開

清水 正二(大洋薬品工業)

伊藤圭介(1803~1901)は、18才にして藩の允許を得て父業を継ぎ医業に就くが、翌年京に上り蘭学を修め、後年蘭医となるのである。医業の傍ら水谷豊文について本草学を修めたが、彼の学識を植えた尾張本草学派は、実地踏査、品評討論、共同研究等を重んずる実証的な学風によって、旧来の本草学者と異なっていた。また、彼は長崎留学中に師事したシーボルトから、帰国に際しツンベルグの「日本植物志(フロラ・ヤポニカ)」を贈られ、それをもとに翌文政12年(1829)「泰西本草名疏」を著わした。これは宇田川榕庵による「西説苦多尼調経」とともに、わが国における純正植物学に関する嚆矢のものであった。なお、しばしば薬品会を主催して自家薬園を設けるなどのほか、天保大飢饉に際して「救荒本草私考」等を刊行しまた牛痘法を紹介するなど“生民広済”を任とする医家の本領を守った人であった。

明治21年(1888)、わが国最初の理学博士となり、31年99才の天寿を完うしたが、彼の本草学発展に対する貢献によって、東京大学名誉教授の称を受け男爵を授けられた。

2) 森島中良と蛮語箋

佐藤 文比古(明治薬大)

森島中良(1154~1808)は、侍医桂川国訓の次子、平賀源内の門人となって蘭学を修め、兄の桂川甫周の家に寄食して翻譯を助け、読書、著述を日課とした。桂林漫録、紅毛雑話の著書は有名である。「蛮語箋」は、寛政10年(1778)に著わされた和蘭辞典であるが、オランダ文字は使われていない。単語数1876で、天文、地理、人倫、飲食、草部、木部など20項目に分類しているが薬物の項はない。しかし、器材、草部等に多数の薬品名が記されている。寛政年代(1789~1800)は、いわゆる膏薬外科から脱皮して、本来の西洋医学が知られるようになった頃で、嘉永元年及同3年の両度に「蛮語箋」の増補改正版(オランダ文字使用)が出ていることからみても、相当に実用されたことが窺われる。

3) わが国奈良朝医薬の時代相

三浦 三郎(山之内製薬・中研)

奈良朝文化の特色の一つは、仏教を国教化することによって思想の統一を図り鎮護国家の思想を以て政治の基調としたことである。天平7~9年、悪疫流行の

惨禍の救いを仏教に求め、隋・唐の官寺に倣って諸国に国分寺の建立に思いいたった。その除病品には病理論である四大不調、各症状、また除病法の8術などが説かれ、インドのアールヴェーダ医学の思想がよく反映している。また鑑真の齎らした經典にはインドの社会文化、医薬などが述べられている。一方、大陸の模倣である医薬制度の整備と運用に熱意を欠き、また官寺の療病院、施薬院、敬田院、悲田院なども社会事業を行う実体をなしておらず、奈良朝貴族はひたすら大陸文化を外面的に模倣したに過ぎない。正倉院薬物にしても、今日まで残っている理由は、それを使いこなす医療技術がなかったからである。

4) 日本における抗生力利用の歴史

川瀬 清(東京薬大)

医薬品の創成を含む、あらゆる技術開発において、歴史的教訓に学び、人民の文化遺産から新たな発想と原理を獲得することは、豊かな体系を構築する一つの道である。日本独特の水産加工品である「鰯節」の起源は遠く古代にまでさかのぼることができる。鰯節製造上「カビ付け」と称する工程があるが、今日この方法を省みると、湿度の高い夏期を過ごす日本において、蛋白体を保存するために、ペニシリウム属などのカビのもつ抗生力を利用した極めて特徴のある方法であったといえる。しかし、菌類がどのような化学変化を与えるかという点に研究の重点がおかれたため、カビ付けを「乾燥中に不良菌の発生を防止する一手段」ととらえた研究も、抗生物質発見につながらなかった。以上から(1)西欧の研究形式に目が向けられ、人民の生活の知恵を問題提起として受けとる姿勢(思想)が欠けていたこと(2)生物現象を、生存のための闘争を内包した動物的均衡系ととらえる生命観が欠けていたことなど、教育、研究上で今日の基本命題が教訓として学びとれる。

5) 医薬分業問題の歴史的背景

吉井千代田(日本薬史学会)

明治7年(1874)、「医制」が公布され、原則として医師の調剤を禁じたが、実情に副わず、長く行なわれなかった。その後、明治22年公布のいわゆる法律第10号薬律によって医師の調剤を許したから、分業問題は今日に到るまで混迷をつづけた。この事は日本の医療の在り方とも深い関係があるとして、幾つかの理由を挙げた。

日 本 薬 史 学 会 会 則

第1条 本会は日本薬史学会 The Japanese Society of History of Pharmacy と名付ける。

第2条 本会は薬学、薬業に関する歴史の調査研究を行い、薬学の進歩発達に寄与することを目的とする。

第3条 本会の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 総会（毎年日本薬学会年会の時に行う）
2. 例会（研究発表会、集談会）
3. 講演会、シンポジウム、ゼミナール、その他
4. 機関誌「薬史学雑誌」の発行。当分の間年2回とする。
5. 資料の収集、資料目録の作製。
6. 薬史学教育の指導ならびに普及。
7. その他必要と認める事業。

第4条 本会の事業目的に賛成し、その目的の達成に協力しようとする人をもって会員とする。

第5条 本会の会員は会費として年額1,000円を前納しなければならない。但し学生は年額500円とする。賛助会員は本会の事業を協賛する人または団体とする。賛助会員は年額5,000円とする。

第6条 本会に次の役員をおく。会長1名、幹事若干名、評議員若干名、役員の任期は2カ年とし重任することを認める。

1. 会長は総会で会員の互選によって選び、本会を代表し会務を総理する。

2. 幹事は総会で会員の互選によって選び、会長を補佐して会務を担当する。

3. 幹事中若干名を常任幹事とし、日常の会務および緊急事項の処理ならびに経理事務を担当する。

4. 評議員は会長の推薦による。

第7条 本会に事務担当者若干名をおく。運営委員会は会長これを委嘱し、常任幹事の指示を受けて日常の事務をとる。

第8条 本会の事業目的を達成するため別に臨時委員を委嘱することができる。

第9条 本会は会長の承認により支部又は部会を設けることができる。

第10条 本会の会則を改正するには総会で出席者の過半数以上の決議によるものとする。

第11条 本会の年度は暦年（1月より12月まで）とする。

第12条 本会の事務所は東京都千代田区神田駿河台日本大学理工学部薬学科内におく。

日本薬史学会役員（昭和41年3月現在）

○印は常任幹事

会長 朝比奈泰彦

幹事 赤須 通美 三浦 三郎

石坂 哲夫 三堀 三郎

○木村雄四郎 根本曾代子

清水藤太郎 ○吉井千代田

（地方） 高橋真太郎 木村 康一

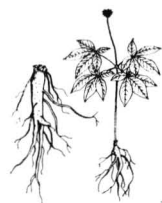
宗田 一 塚本 赴夫

慢性胃弱の方へおくる一新発売!!

▲タケダ漢方胃腸薬

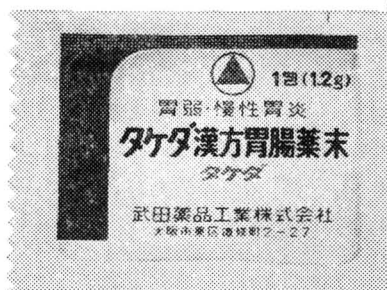
- 古くから伝えられ、選りすぐられてきた漢方処方を
タケダがより効果的に改良した新しい漢方胃腸薬
- 漢方薬特有の香味をもったのみやすい胃腸薬です
- 胃腸の血行をよくして、そのはたらきを正常にします

- 弱った胃腸の運動をたかめ、はたらきを活発にします
 - あせらず気ながに胃腸をなおしてください
- 〈効能〉 胃弱・胃のもたれ・慢性胃炎・腸内異常発酵
食欲不振・胸やけ・消化不良・胃下垂・便秘不整



ニンジンエキス
健胃・強壯などの作用が
盛んにし、胃の衰弱、消化
不良、食欲不振にすぐれた
効きめをあらわします。

錠剤 60錠・160錠 末 20包・50包



ソウジュツ (蒼朮)
ビャクジュツ (白朮)
芳香性の健胃薬で、消化液
の分泌を調節し、胃の水分
代謝を正常にする働きがあ
ります。



カンソウ (甘草)
各成分の作用を調和し胃壁
のけいれんをやわらげ鎮痛
作用をあらわします。



オウレン (黄連)
炎症をおさえ、胃腸の働き
を促し消化不良、みぞおち
のつかえなどにすぐれた効
果があります。



ショウキョウ (生薑)
芳香性の健胃薬で、新陳代
謝を正常にし、食欲を増進
します。



ボレイ (牡蠣)
過剰の胃酸を中和して胃の
粘膜を保護します。また、
腹部の動悸をさめたり、神
経をしずめる作用があります。



チンピ (陳皮)
和厚朴と協力して胃の働き
を活発にします。



コウボク (和厚朴)
胃の働きを正常にし、蒼朮
白朮と協力して食物が胃内
に停滞するのを防ぎます。
また、腹部の膨満感を取り
除きます。

ほかに乾燥酵母も配合しています。